大学教育開発研究シリーズ
NO.1 ● March 2006

外から見た立教大学

―ミッションと社会的要請―

開設1周年記念シンポジウム

立教大学
大学教育開発・支援センター
ISSN 1881-1035

外から見た立教大学

―ミッションと社会的要請―

大学教育開発研究シリーズ
No. 1

立教大学

「大学教育開発研究シリーズ」の創刊にあたって

檜枝　光太郎

立教大学の全カリ運営センター、学部、大学院研究科、さらには学科・コース・課程などでは、さまざまな教育改善の工夫やカリキュラム改革が、休むことなく行なわれている。また事務局の各部・課でも改善の試みが日常的に行なわれている。それらの働きを支援し、有用な情報を蓄えておくことはできないだろうか。一方、現在強く求められているFD（ファカルティ・ディベロップメント）やSD（スタッフ・ディベロップメント）についても、それを援助する機関をつくっておく必要があるのではないか。このような願いのもとに設けられたのが「大学教育開発・支援センター」である。

立教大学がますます大学らしくなるための活動は無限にある。だがその中で特に求められるのは、大学に関する正確な情報を収集することであり、それを適切に分析することである。そしてそれらの収集や分析が成り立つために不可欠なのは、実証的な調査活動である。調査のテーマは、当然ながら立教大学の改革・改善にとって急務のものであるべきだが、調査方法自体は周到かつ科学的な手続きによるものでなければならない。

さらに、何よりも大切なのは、集められた情報、分析された成果が大学内のあらゆるメンバーによって共有されることである。加えて、個別立教大学内の情報に止まらず、立教の改革課題が日本全体の大学が共通に負っている課題とどのように連なっているかも重要なポイントである。大学教職員・学生による、主体的な情報共有の作業、それに基づく改革課題の発見――この作業こそ、大学を行政や社会から自立させ、確かな判断を育成していく最も大切な仕事ではなかろうか。

本シリーズは、このような要請に応えるために企画された。繰り返すと、「支援」活動上重要と判断した事柄について、調査・研究した成果を、基礎資料とともに刊行するものである。

学内にはさまざまなセンターがあり、本センターはその一つである。部長会とほぼ重なる運営委員会によって運営され、いくつかの学部から委嘱され

たセンター員によって企画され、学術調査員によって研究作業が進められ、事務局によって支えられている全学的組織である。センター会議が発議し、運営委員会が決定したプロジェクトの成果が、今後もこのシリーズを形づくっていくことになろう。

本センターは、このところ他大学に多数置かれ始めているいわゆる「大学教育研究センター」とは性格を異にする。大学教育の研究それ自体を目的とするのではなく、立教大学の教育改善のために存在している。しかし、この「大学教育開発研究シリーズ」が日本の多くの大学教育研究の一資料になれば、それに過ぎる幸いはない。学外の多くの機関からも意見や批評を寄せてくださることを願っている。

（立教大学大学教育開発・支援センター長）

大学教育開発研究シリーズ　　No. 1（2006年 3 月）

目　　次

「大学教育開発研究シリーズ」の創刊にあたって

第一部　シンポジウム …… 1
発表 1：小林　哲夫 氏 …… 2
発表 2：助川　幸彦 氏 …… 10
発表 3：滝　　紀子 氏 …… 16
発表 4：冨塚　　優 氏 …… 22

第二部　パネルディスカッション …… 34
指定討論 …… 35
ディスカッション …… 39

資　料 …… 60
資料 1：小林　哲夫 氏 …… 60
資料 2：助川　幸彦 氏 …… 68
資料 3：滝　　紀子 氏 …… 70
資料 4：冨塚　　優 氏 …… 76
資料 5：檜枝光太郎 氏 …… 89

外から見た立教大学

―ミッションと社会的要請―

2005年11月24日（木）に行った
開設１周年記念シンポジウムの記録である

プログラム

〈第一部〉シンポジウム

シンポジスト　**小林　哲夫**（こばやし　てつお）
教育ジャーナリスト、「大学ランキング」編集統括者

助川　幸彦（すけがわ　ゆきひこ）
芝中学・高等学校校長、本学 OB

滝　　紀子（たき　のりこ）
河合塾教育研究部部長

冨塚　　優（とみづか　すぐる）
株式会社リクルート国内旅行ディビジョン長、本学 OB

〈第二部〉パネルディスカッション

指定討論者　**檜枝　光太郎**（ひえだ　こうたろう）
本学大学教育開発・支援センター長、理学部長

司　　会　**山口　和範**（やまぐち　かずのり）
本学教務部長、社会学部教授

日　　時　2005年11月24日（木）17：30～20：30
場　　所　立教大学池袋キャンパス11号館地下 AB01教室

第一部　シンポジウム

山口　大学教育開発・支援センター開設１周年記念シンポジウムを始めたいと思います。本日、司会を務めます、現在、教務部長をしています社会学部の山口です。よろしくお願いいたします。

本日のシンポジウムは二部構成になっておりまして、第一部でシンポジストの方から講演をいただき、第二部でそれに基づいたパネルディスカッションを行いたいと考えています。

開設１周年記念のシンポジウムということですので、最初に大学教育開発・支援センターセンター長からご挨拶を申し上げたいと思います。よろしくお願いします。

檜枝　センター長の檜枝です。大学教育開発・支援センターは去年の10月１日に発足しました。１年と少し経ったということで、記念シンポジウムとして「外から見た立教大学－ミッションと社会的要請－」を企画しました。第二部のパネルディスカッションにもぜひ積極的に参加していただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

山口　それでは、さっそく第一部のシンポジウムに入っていきたいと思います。本日の進め方ですけれども、４名のシンポジストの方にそれぞれ20分ずつご講演をいただき、そのあと10分間休憩を挟んだあとに、フロアの方も交えたかたちでディスカッションを行って、本日、このタイトルにある「外から見た立教大学－ミッションと社会的要請－」ということについて議論していきたいと思います。

第一部のほうは20分ずつ話していただくということで、その場では質問は受けずに、あとのほうで受けるというスタイルをとりたいと思いますので、そのようにご理解の上、ご参加いただければと思います。

シンポジストの紹介

それでは４名のシンポジストの方をご紹介いたします。講演順にご紹介いたします。まず、教育ジャーナリストで、朝日新聞社『大学ランキング』編集総括の小林哲夫さんです。よろしくお願いします。続きまして、1970年に

本学の日本文学科、1974年に大学院の文学研究科を修了された、現在、芝中学・高等学校の校長の助川幸彦さんです。よろしくお願いします。続きまして、現在、河合塾教育研究部長の滝紀子さんです。最後ですけれども、1988年に法学部を卒業され、現在は株式会社リクルートの国内旅行ディビジョン長をなさっており、これまで、いわゆる就職に関してリクルートでいろいろとお仕事をされていた冨塚優さんです。よろしくお願いします。以上4名の方に講演をお願いし、その講演を受けたかたちでディスカッションを進めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、小林さんから講演をお願いしたいと思います。

大学の状況と立教大学の評価

小林　『大学ランキング』という朝日新聞社から出している大学評価の本の編集をやっている小林と申します。よろしくお願いいたします。

今日は、全般的な話として今の大学の状況と、後半では立教大学の外部からの評価をどう位置づけたらいいのかについて、ランキングというものをつくっていたなかで感じたことをお話ししたいと思います。

レジュメを少しつくってきたのですが、かなりアットランダムにまとめてきました。大学改革といわれてずいぶん久しいのですけれども、では今、大学はどうなっているのかということを非常にかいつまんでお話ししたいと思います。黒板を少し書きますので、マイクを離しますけれども、ご容赦ください。

現在の大学の大きなテーマは“補習”と“就職”

今から14、15年前、大学改革、設置基準大綱化といわれて、大学がいろいろな取り組みをしました。そこで一番力を入れていたものを、一番わかりやすい例で言います。平たく言うとコンピュータと英語教育に各大学さんが一斉に取り組んだと言っても過言ではないほど力を入れました。その結果どうなったかというと、ではどれだけコンピュータを使えるようになった学生さんが増えたか。みんな英語を話せるようになったのかどうかというのは、実は各大学さんであまり検証されていないような気がしてなりません。今、こ

の２つのキーワードを、わが大学は情報教育、外国語教育に力を入れていますよというところは、ほとんどないと思います。当たり前のようにカリキュラムに取り込まれているからです。1990年代のパンフレットを見ると、本当にこれをよく見かけました。

小林哲夫氏

それでは、2005年の今、何がこの言葉に変わったかというと、ちょっと飛びますけれども、５ページ目の「（１）はじめに」の真ん中ぐらいに書いてあります。今の大学がキーワードとしてパンフレットその他で一番訴えていることというのが、資格取得、就職支援、教養教育、補習授業。なかでも、これは今の日本の教育制度を反映していると思うのですけれども、補習と就職。ウェブサイトやパンフレットや各大学のカリキュラムを見ると、これが非常にたくさん出てくるようになりました。本当にこれは現実的な課題だと思います。補習というのは、大学の授業についていけない。就職というのは、就職実績を上げないと学生募集にかかわってくるという、情報教育と外国語教育はどちらかというと教育のあり方をどう考えていくのか、その一つの方法論として考えられたのですが、補習、就職ということになると、これは大学によっては生き残り戦略をかけた一つの方法論として語られたと言っていいかと思います。

実は、今から５、６年前なのですけれども、ある大学さんが、それほど難易度は低いわけではないのですけれども、パンフレットに中学と高校の授業をもう一度おさらいしますということを大学のパンフレットに書いたことによって、高校側から、こんな大学はちょっとと言われるのではないかという心配をしていた方がいて、どうしたらいいですかという相談を受けたことがあります。今はそんな相談を受ける前に、もう堂々と出ている。これはやはり授業時間数の問題と進学率の問題と、いろいろな見方がありますけれども、学力低下。僕は、学力低下というよりはむしろ学力未到達だと思います。日本人はそう低下したというか、頭が悪くなったと思えないので、僕は共通一

次第一期生の昭和54入試世代なのですが、そのころと今の世代を比べて根本的に低下しているのかというと、僕はちょっと懐疑的な見方です。教育システムが変わってしまったということと、僕らのころは30％から40％ぐらいと、進学率が非常に上がってしまった。大学、学生の多様化になってしまえば、こういうことになってもおかしくないのではないかなという気がします。ですから、この補習、就職というのが、どこの大学をまわっても大きなテーマになっています。

就職というのは、さらに言いますと、これまでの就職というキーワードは、どう就職実績を上げるかというところで、結構テクニカルなところをわりと重視していた。就職課時代のことなのですが。それもだいぶ様変わりしてきまして、「働くって何」、「お金を稼ぐってどういうこと」、「仕事をするってどういうこと」というところ。これはキャリアをアップする以前の問題として、人間として働くというのはどういうことなのだろうかというところから、職業観というか、生きるとはどんなことかというところ。大学がそのへんのテーマまで掘り下げるようになった。

これはなぜか。大学さんによれば、やはり受験、受験で生きてきて、社会で生きることや常識や礼儀やマナーといったことは、18歳まであまりよくわからなかったと。大学に入って、たとえば就職の模擬面接で帽子をかぶったまま学生さんが来た。なぜ帽子をかぶってはいけないのかということ。電車のなかで化粧をするということ、割り込む、携帯電話で話すという、そういう礼儀、マナーのところが、大学でそれはいけないよというところまで言わなければならなくなったというところが、一部の大学と言ってもいいのかわからないのですけれども、よく聞くようになりました。これは中高教育のツケがきたのではないか、大学が全部教えることになるのではないのか。つまり、大学が社会との接点、社会に出るために、大学では最低限これだけのことを身につける。それが就職というか、働くって何ということ。それが入学してすぐ一年次から、働くということに対しての意識を考えてもらうということ。そういうようなことを考える大学が増えてきたと言えると思います。

ですから、ほんの10年前までは情報と外国語だったのが、補習と就職になった。この補習ということが、この時代に情報と外国語という、1990年代に言われてきた時代に、立教大学は違いますけれども、教養教育をおざなりに

されていた大学がありました。このへんのところで教養教育をきちんとというのも、最近の大学の傾向として出てきました。では、どうしたらいいかということになると、わからない。

教育ということなのですが、補習教育があり、では一般教育、専門教育というのが改革を通してどう変わっていったか。これは、僕は大学評価の本をつくっている関係で、教育関係のいろいろな難しい本などを読んでみて、いまだによくわからないのが、実はFDなのです。ファカルティ・デベロップメントというのが、僕のなかではなかなかすんなりといかない。教育能力というか、教え方というか、どうしたらいいのか。それまでは一教員のパーソナリティであったり、能力であったり、工夫であったり、教員が独立した立場で教え方を工夫してということ、少なくとも僕らの時代ではそうであったと思います。それが、大学のなかの一つの制度として、教え方をどう研究したらいいのかという時代になりました。でも、その結果どうなったのか、FDが入ってどうなったかというのが、すみません、僕のなかでは、今この場できちんと展開することができないなと思いました。

教員と学生の信頼関係

これはFDとは直接関係ないのですけれども、教育ということを、たとえば教員と学生とのコミュニケーション、信頼関係ということ。それから、教室の場で、教える場で教員がどうフレキシブルに対応できるかということについて言うならば、一つ関心というか、えっと思ったことがありました。これはいろいろなところで話しているのですが、今年の4月下旬、福知山線の事故で多くの学生さんが亡くなりました。僕は死亡した学生さんのいた大学をずいぶんまわって、どう対応しましたかということ、危機管理をどう対応しましたかということをいろいろうかがってみたのですが、そのなかで一番多くの被害者を出した同志社大学の京田辺キャンパスで、事故があった日の、あの事故が確か午前9時何分で、お昼前に一報が続々入ってきたのですが、お昼ごろになると京田辺キャンパスの学生がどうもそわそわしてきて、学生に事故が伝わったと。事故で友達が亡くなったのではないかと、みんなそわそわしたと。午後最初の授業のときに、授業を前にして学生さんがみんな青ざめている。そのときに、同志社の先生がこう言いました。「授業中は携帯

電話を使うのはもってのほかだ。携帯メールもいけない。授業はきちんと受けなさいというのが原則だ、ルールだ。それは厳しく守ってもらいたい。ただし、今日は例外だ。今日この時間、メールと携帯電話をすることは許す。もし友達の消息が心配ならば、それはいい」と。おそらく大学の授業のなかで、携帯電話、メールをしてもいいよと言ったのは、たぶんこれが初めてなのではないかと感じました。

それの良し悪しは置いておきますが、そのときの先生が、そういうように対応できるのかどうかということに、僕は感心しました。そこで友達がどうなっているのかわからないといったときに、教員という立場でどのように考えたらいいのかということも、すごく考えさせられました。

僕は25年前の学生と申し上げたのですが、学生の身に何か起こったときに、教員がどこまでケアできるかどうかということも、もしかしたら今後問われてくるのではないのかなということも、ちょっと感じました。

もう一つ、先ほどの大学の特徴なのですが、この事故で私が一番感じたのが、学生さんが一番乗っていた電車なので、大学さんがどうやって第一報をしたかというと、一番多かったのが、親御さんからの問い合わせなのです。うちの息子、うちの娘が電車に乗っているかもしれないのだけれども、大学で授業に出ているかどうか調べてほしいという問い合わせなのですね。職員が問い合わせて、この授業ではと。少し冷めた目で考えてみると、小中高校のような話と言えないことはないのですね。うちの子どもがどうなったのかちょっと心配なのだけれども、ということ。

大学の「学校化」

教育社会学者の先生方というのは、「学校化」という言葉をよく言われます。ちょっとこじつけて言うと、学生と親御さんにとっては、大学というものをわりと小学校、中学校、高校と同じような感覚でとらえている節がある。したがって、大学もそれをわかっていますから、僕らの時代ではちょっと考えられなかったのですけれども、たとえば就職関係や、生徒、学生への教育上の指導に三者面談を取り入れると。これはよくあるのですけれども、たとえば成績を親に渡すとか、親を巻き込んだかたちでの教育指導を、各大学さんがわりと多く取り入れているということです。

ちょっと話を戻しますが、就職について言うと、これもだいぶ変わりました。変わりましたと私はあえて断言してしまいますが、教授会で、今年のうちの学部の就職実績は何％だというようなことが語られるようになりました。僕は立教大学はよくわからないのですが、これはいくつかの大学をまわったときに、教授会では学生の進路がどうのこうのというのは、とても話題にならなかったと。あくまでも教学が中心だったのが、これは就職課関係、キャリアセンター関係からの協力というか話、突き上げもあったのかもしれませんけれども、教授会のなかで進路について、とりわけ就職についてどうしたらいいのかということが議論されるようになった。これはどう理解したらいいのかなと思って聞いたところ、大学教育とは何か。就職指導も大学教育の一環であると断言される先生がぼちぼち増えていらっしゃいます。なぜかというと、就職指導というのは、社会へ踏み出すための、社会で活躍するための第一歩であるということを考えると、これは教育ではないかと。どこの会社にどう入ろうかということではなくて、もっと広い意味で、働くためにどうしたらいいのか。先ほど言ったように、「働くって何」という話なのですけれども、就職というのは、ちょっと前でしたら、教育、教授会の外だったのが、教育カリキュラムのなかに就職というのが入ってしまっている。就職指導、進路支援というのは大学教育の一環であるとばっさり言ってしまう先生方が増えたのにも、ちょっと驚きました。これは1990年代にはあまりなかったのですけれども、そういう話を聞いてちょっと驚いたということがあります。

ちょっとおさらいしますけれども、情報・外国語が当たり前のようになった時代から、補習・就職というのがキーワードになった。特に、進路、教養、補習というのが一つのキーワードになっているということです。

もう一つエピソードを言いますと、ある工科大学さんが、やはり学生の募集で大変なので、ちょっと学力の到達が難しい学生さんも入れたと。工学系なので、数学などの理系科目が非常に大変だと。高校というレベルではなくて、中学校ぐらい、下手すれば小学校レベルの計算力もつけなければならない。おたくの大学では補習に何をやっていますかと聞いたときに、これはレアケースなのかもしれませんけれども、返ってきた言葉が「100ます計算をやらせています」と。工科系の大学の補習教育で100ます計算をやらせてい

ると。それは、計算をする訓練というのをもう一回やる。そういう学生をとにかく一気に引き受けることによって、大学のあり方がまたちょっと問われるのではないかと感じました。ここ４、５年、いろいろ考えさせられることが多かったと、今ふり返ると言えます。

ですから、大学とイメージがほんの10年前、大綱化のころともだいぶ変わってきたのではないのかなと思います。というのが、大学のまとめです。

『大学ランキング』で分析する立教大学

立教大学さんについてなのですけれども、『大学ランキング』という本で、学長評価と高校評価ということをやっています。金沢工大や立命館大学というのが挙がってくると思うのですが、いつも不思議に思ったのが、立教大学の全カリを評価するような先生というのがあまりいらっしゃらないのかなと。学長評価で教育分野でということになると、たとえば120人の学長が金沢工大を挙げていて、立教大学は７人の学長が挙げていると。金沢工大の売りというのは補習なのですけれども、このあたりは認知度というか、少しもったいないなという気がしてなりません。これはもう広報戦略上の問題なのかなという気がしました。

それから教員の話ですが、これはたぶんに偶然性が左右されているところはあるのですけれども、２ページ目にちょっと記しました。立教大学教員の自校出身者の割合を見てみたのですけれども、経済学部と理学部は、最終学歴が大学院なのですけれども、自校出身者がほかの大学に比べて比較的多い。ほかの大学というのは、だいたい同規模、同レベルの大学です。法学部、文学部というのは、自校出身者の割合が少ないという傾向があります。これはどう分析していいのか、私はちょっとわかりませんが。

それから博士号。僕が意外だったのが、法学部と文学部教員の博士号取得者は結構多いです。逆に、経済学部系というのが、意外に少ないなというのがちょっと気になりました。

最後にもう一つ、立教大学の学生さんの特徴ということについて言いますと、入試で立教大学を受ける場合に、非常にあるイメージがあります。これは私たちの時代からそうだったのですけれども、たとえば上智大学、青山学院大学、学習院大学、成城大学、成蹊大学、わりとその並びの併願パターン

というのがありまして、今挙げた学習院、上智、青山学院、成城、成蹊という、わりと立教大学の併願の多い大学の卒業生の進路というのは、商社や金融、銀行、生損保が多いです。立教大学と難易度がわりと近い法政大学、明治大学、日本大学、東洋大学、いわゆる日東駒専といわれている大学は、そのパターンで併願がある傾向があるのですが、卒業後、公務員が多いです。なかでも中央大学というのは、警察官がやたら多いのですね。これは長年、どうしたわけかわからないのですけれども。立教大学は警察官はそんなに多くないと思うのです。これは、高校時代のイメージカラーなのか、大学からなのかちょっとわからないのですけれども、入り口のときの併願パターンの大学というのは、卒業後もわりと性格を同じにするものなのかなというのが、就職状況の業種を見てちょっと驚きました。もちろん立教大学にも公務員はいますけれども、やはり法政や明治に比べると公務員は非常に少ない。その理由というのはイメージなのか、進路指導なのかちょっとわからないのですけれども、そういう傾向にあるのかなという気がしました。

立教大学に関してはいろいろな見方がありますけれども、それについてはまた後ほど質問を受けますので、このぐらいにしておきます。ちょっと時間を過ぎて申し訳ありません。大学の今の状況、補習、就職というあり方が今後どう進んでいくのかわかりませんけれども、これが状況なのかなということでお話しいたしました。どうもありがとうございました。

自己将来の学問分野、職業領域を設定できる中学・高校教育

山口　どうもありがとうございました。ちょっと時間に制約があってお話しし足りなかったところがあると思いますけれども、後ほどまたディスカッションのところでよろしくお願いいたします。質問は、冒頭で申しましたように、ディスカッションのところでまとめたかたちで受けることにしたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは続きまして、芝中学・高等学校校長の助川幸彦先生に次の講演をお願いしたいと思います。助川先生には、中高生が大学をどのように選ぶのかということ。また、立教大学のOBということですので、立教大学がどのような大学になってほしいかということで講演をお願いしています。よろし

くお願いいたします。

一般的には進学指導で大学、学部を選択

助川　こんばんは。私に与えられているのは、今、司会者のほうからありましたように、中高生は大学をどのように選ぶのかということですが、中学・高校といっても学校によってスタンスがまったく違う。ですから、やはりできるだけいろいろな学校の例を挙げながら、選ぶということについて申し上げたいと思います。

まず、生徒が大学を選ぶときに、当然のことながら、一番最後は偏差値を参考にするのですが、そういう話をすると、これは河合塾の滝さんがあとでお話しされるでしょうけれども、滝さんの話のほうが当然私よりもさまざまな資料を持っていらっしゃるということで、有効かと思います。私としては中学、高校として生徒が大学、学部を選択する以前に、どのようなことを考えさせようとしているのか、ということを20分間、申し述べたいと思います。

まず、一般的な進学指導という言い方からすると、私は1970年、昭和45年に立教大学を出ましたけれども、私が入ったころとほとんど変わっていません。進学指導係による説明会、あるいは卒業生による大学説明会。それから、各大学の広報部による説明会。これは近ごろ、たぶんここのところ10数年ぐらい行っていると思います。私のいる芝の場合ですと、説明に来てもらうのは慶應、立教、中央、明治、東京理科大、北里大学医学部だけです。

自分探しの「ドリカム」プラン

普通は以上のようなかたちでやるのですけれども、今、中学、高校で自分探しということが行われています。その一つの例ですが、福岡県立城南高等学校で「ドリカムプラン」というのを立ち上げています。Dream comes true ですね。何をやっているのか。高校一年は調査の年ということで、まず年５、６回、人はいかにあるべきなのかというガイダンスをまず第一に行う。第二点として、「10年後の私」、「20年後の私」という作文を書かせて、将来のことを自分から考えるようにもっていく。それから、シラバスレポート。大学のシラバスを調査して、自分に合っているかどうかを、これはインターネットなどを使うとできますので、そういうことをやらせる。それから、

ディベート大会。会社に関係する内容を調べさせるのが目的で勝敗は無関係でやらせる。そして最後に、ドリカムグループ９系統を選択。理学、工学、医療保健、生物農学、人文科学、社会科学、芸術、教育、生活科学。こういった９つの系統から、自分が将来どれを選ぶのか。そこで決定しなくてもいいのだけれども、考えさせるというのが１年目です。

助川幸彦氏

高校二年では、一年でやったことをふまえてシラバス研究。それから、オープンキャンパスへの参加。これは高校の立場からするとかなり有効です。つまり、大学がどれだけ真剣に取り組んでいるのかということが問われる。それから、ジョイントセミナー。この学校は九州の学校ですので、九州大学を含めて大学から先生をお呼びして、そこで講義をしてもらう。優秀な生徒の場合には、当然ながら九州大学をそのまま受けるということが起こります。

高校三年は学力の養成ということになりますけれども、こういうかたちでやっています。

ついでに言いますと、福岡はかなり名門校が多く、城南高校というのはそのなかで中の上というような位置です。国立大学が年186名。私が持っている資料は平成14年ということで少し古いのですけれども、一学年の生徒数300名台の学校が、その半数以上を国立大学に送っているということで、受験生を集めています。また、こういうかたちでやらないと、実は高校も集まらない。そういった熾烈な競争のなかで、このドリカム計画があります。

卒業論文を書かせる中学校

それでは中学校はどうなのか。代表として、私立海城中学ですね。ここは中学卒業論文を書かせます。それによって、社会に対して目を向かせようということを考えています。社会的視野を大きく広げ、論理的思考力や自分で問題を立て、自分で調べ、研究できる力の養成を図る。まるで大学生なみのことを考えています。中学一年では生徒に社会的関心を喚起させることにま

ず主眼が置かれる。中学二年で問題を一般化し、政治経済、世界との関係まで見据える。それで中学三年のときに、原稿用紙30枚から50枚の卒業論文を仕上げる。卒論の内容は、民族問題、過労死、原発問題、高齢化社会、夫婦別姓、中学生のことですから、Ｊリーグなども含め、全員が卒論を書く。結果的に、将来の目的・方針を持つ生徒が増えるということになる、と思います。今、海城中学は、中学高校としてはかなり上位校になっていますけれども、この試みをやってから生徒の質が違ってきたと言われています。ですから、生徒に自分について、大学について、社会について、考えさせるということは、生徒の質を高めるということにもなります。

中学・高校一環して進路適性検査

次は、高校、中学ときましたので、中学、高校両方を通じてやっているところということで、今度は女子校の私立の鴎友学園中学高等学校を例にあげます。中学一年で「自分レポート」を出させる。この「自分レポート」というのは、幼少時から現在に至るまでの、周囲からつくられた自分を再確認し、その生き方を受け入れた上で、今後の自分を自ら展望させるということを目的としています。中学一年の終わりから中学二年にかけては、環境問題や福祉問題を扱う。これは、社会的な大きな枠組みのなかで生きている自分を自覚させることで、要するに、たとえば自分が住んでいる市町村の役所などに行って、自分の住んでいる市、区などの問題はどういうところにあるのか、その問題にどのように取り組んでいるかということを聞きに行く。まずそういうことからやらせるということです。

中学三年のときに、実社会とのつながりを自覚させる。ここで卒業生による進路説明会、職業についてなど、また家族との対話を通して自分の夢をそこで築いていく。それをまたレポートさせるなどということを行って、その上で高校一年に入って、進路適性検査を通して将来を見据え、その実現につながる大学の学部学科の調査をやらせているということですね。

学校によっていろいろ違ってきているのですけれども、はっきり言って先ほど申し上げたとおり、一般的なことしかやらない学校のほうが圧倒的に多数です。城南や海城、鴎友などは、たぶん少数派に属するのだろうと思っています。

大学・職場を訪問して将来のイメージを

それでは、私の学校は一体どうなのかということは、一応、資料のほうでお渡ししてあると思いますけれども、まずうちの学校は、この2005年度の大学職場訪問の予定のほうからちょっと述べさせていただきます。読んでおわかりのとおり、残念ながらこのなかには立教大学は入っていません。大学は東京理科大、中央大学文学部、東京大学工学部、慶應義塾大学経済学部、いろいろあるのですけれども、なぜこういう結果になるかというと、学校としてもオープンキャンパス以上に大学が何をやっているのかを見させたい。そうなってくると、内部に入り込むしかないのですね。たとえばそこに書いてあるように、理科大に行って研究室を見学する。そうするとおわかりのように、教授、助教授、助手、大学院生が何を研究しているか、その研究内容まで、今こういうことをやっているということまで言ってくれるわけですね。それで具体的に、ああなるほど、こういうことまでやるのかと、生徒はそこでイメージが浮かぶということになります。あとは授業見学に直接入れて、場合によっては教科書を渡されて、その大学で何をやっているのかということで、生徒の参考になる。だから、たとえば東京大学工学部では、超伝導の研究室を見学しているのですが、行くことによって、現実に行って、生徒はこの大学を受けようというところまで考えるのですね。ここに書いてある以外に、たとえば青山学院大学とか、その他の大学にも実は行ったことがあります。私どもの学校の卒業生で大学の教員になった人、あるいは芝の教員との個人的つながりでこういうことを行っているわけですね。

それで、東大だからそういうことが起きるのだろうとお考えかもしれませんけれども、かつてこういう生徒がいました。親は東大は受けられるだろうと考え、教員もそう思っていた生徒もがいました。その生徒が、青山学院大学の仏文科に入った。入ったというよりも、当時推薦があったのですね。それで入った。親は反対した。なぜ東大を受けないのか。だけれども、その子は、その研究室に行ったら雰囲気が非常に良かった。先輩たちも非常に丁寧だった。先生も丁寧だった。自分として、4 年間丁寧ななかできちんと教えてもらえばいい。自分の考えは、フランス文学、文化研究だから、大学院はフランスに直接行く。だから 4 年間、フランス語とフランスの文化などをちゃんと教えてくれればいいという考えだったのです。そういう考えでも行く。

これは非常に程度の高い生徒が青山学院大学を選んだという一つの例になります。

ですから、こういうこともやっていますよというかたちで立教大学が門戸を開いてくれれば、もちろんうちの生徒もいろいろな生徒が行くはずです。ただし、多くはありません。各研究室、大学に行くのも、多い場合でも10数人、少ない場合は１人、２人ということになりますけれども、でも、そこの大学に入る可能性が非常に強くなります。

今度は、私の学校のほうでどういうことをやっているのかということをお話しします。２年前から進路指導委員会というのを立ち上げました。要するに、進学でもなく、学習でもなくて、きちんと自分の将来を考えさせようということで、２年前からやりました。やり始めたとき、高校二年ぐらいの生徒の場合には、高二の段階で職業調べで全員にレポートを出させました。いろいろな職業を調べる。自分のお父さんに聞いてもいい、おじさんに聞いてもいい、近所の人に聞いてもいい。いろいろな職業を聞いて、その内容ですね。なぜそれを選んだのか、今やっていてどうなのか、今やっていて足りないのは何なのかということをレポートさせました。なおかつ高三の段階でオープンキャンパス見学を二校以上させました。

ただし今の段階では、皆さんにお渡ししてあるように、中学一年から考えています。中学一年から「自己発見シート」というのを出させて、それに答えさせる。自分の夢は何なのか、小学校でどういう生活を送ってきたのか。それをふまえて、中学では何をしたいのか。中一が終わったら中二でまた同じようなことをさせます。そして、高校一年では、今度は職業調査を行います。今年からなのですけれども、実は職業調べだけではなくて、これはリクルート社の「適職・適学診断プログラム」、Ｒ－CAP という略称になっていますが、それを通じて、生徒の性格傾向はどうなのか、仕事の好みはどうなのか、学問適性はどういう適性があるのか。それから、職業適性はどうなのかというようなかたちでやらせています。今それを中学三年でできないかどうかを検討中ということです。そして、その上で高校二年で大学オープンキャンパスを見学させる。そうすると、自分の適性を把握した上で、自己将来の学問分野、職業領域を自分で設定できると思っています。

リベラルアーツの PR が必要な立教大学

これも一つ細かいことですけれども、では決められない生徒はどうなのかということなのですけれども、今年こういう例がありました。これはトップの生徒だから、特別と言えば特別かもしれません。その生徒は決められなかった。もっと言えば決めたくなかった。そこで、リベラルアーツの学校を選んだ。彼が選んだのは何かというと、東大と国際基督教大学なのですね。残念ながらそこに立教大学は入っていなかった。結局彼は東大を受けた。もう一つは、アメリカのウエスリアン大学という大学を選びました。結局東大は受かったけれどもウエスリアン大学に行きました。これは特待生ということで、試験、論文、最終的にウエスリアン大学の学長との個人面談で特待生に選ばれました。日本での枠は２人です。男性１人、女性１人の枠ですから、ちょっとこれは特別かもしれません。私としては残念なのは、立教大学がリベラルアーツを掲げながら、実際にはその選択肢のなかには入らなかったというところです。

それからもう一つ、もう時間がないので急ぎますけれども、一応、私の学校の一年、二年の「自己発見シート」をお配りしています。細かいところまではお気づきにならないかもしれませんけれども、これを出しているのは学年と相談係なのですね。うちの学校には相談係があります。カウンセラーの認定証を持っている３人の教員がいます。そのほかに上智大学から来ているスーパーバイザーがいます。彼らの意見を訊きながら、将来、社会に出て何をしたいのか、生徒にそこまで突き詰めさせようという試みがこれです。

こういった学校は今少数ですけれども、今後たぶん増えてくる。増えてくる理由は何か。城南も海城もそうです。実は芝もそうなのですけれども、これをやらせたことによって大学の結果が違ってきている。去年、芝は国立大学だけで言うと63名、今年は92名です。昨年は早稲田と慶應の２校だけで80名が、今年は140名です。全然違ってきているというこの事実に、やはり他の学校も気づくはずです。もちろん気づいたからといって、これができるかどうかはその学校の実力で、簡単にできるとは思っていません。

もう一つ。先ほど申し上げたとおりなのですけれども、リベラルアーツとは一体何なのか。学校に対する私の要望です。それをもうちょっとはっきりしてほしい。国際基督教大学の場合には、リベラルアーツというのは、単な

る一般教養ではないのだと。専門の知識を、いろいろな分野の専門を勉強できる、それも学部学科それぞれにおいて。これは私も調べました。立教大学もそれに近いかたちでやっています。やはりそれをもっと宣伝してほしいと同時に、また先ほど申し上げたとおり、外部から直接入れるようなかたちで受け入れてほしいということです。相談係について、私が残念だなと思ったのは、スーパーバイザーが上智大学から来ています。その上、カウンセラーはみんな上智大学に学んでいるのです。何故かというと、上智大学は夜間に教員を受け入れている。一番最初に上智で認定を取った教員が、実は立教大学に電話をしています。立教大学で受け入れてくれないか。立教大学では受け入れていないという返事でした。今後やはり高校との連携を、立教大学がどれだけとれるのか。その高校の内実をどれだけ探れるのかが、立教大学のレベルアップということにかかわってくるのではないかという疑問を投げかけて、私の話は終わりたいと思います。

河合塾の調査による立教大学の現状

山口　どうもありがとうございました。特に最後にご指摘いただいた、高校との連携というところはディスカッションのところでも詳しく討論したいと思います。

それでは、３番目の講演に移りたいと思います。河合塾教育研究部部長の滝さんに次の講演をお願いしています。パワーポイントの準備がありますので、ちょっとお待ちください。

講演の内容としましては、河合塾のさまざまな調査による立教大学の現状についてお話をしていただき、立教大学がどういう方向を向いて、どういうことで次を目指していかないといけないかということについてご紹介いただければと思います。では、よろしくお願いします。

立教大学の入試難易度

滝　河合塾の滝です。どうぞよろしくお願いします。

まず予備校的に、立教大学の入試難易度をご紹介したいと思います。〔p.×資料３,②〕こちらのほうは文学部の学科を抜粋させていただいていま

す。実は立教大学というのは、たとえば英米文学科で見ていただきますと、10年前、５年前、2005年度と約10年間の推移を見た場合、偏差値62.5と変わっていないです。ご存じのように、1992年度が18歳人口のピークのときで、入試として一番難しかったころで、その後徐々に各大学の偏差値は下がってきています。このような状況のなか、偏差値が下がっていない私立大学というのは、慶應義塾、早稲田、上智くらいです。そういう観点で他学部もみてみましょう。〔p.×資料３,③〕

滝　紀子氏

社会学部社会学科は1995年度が65.0だったのが、2000年度は62.5と下がったのですが、2005年度に65.0とまたアップしました。あるいは法学部法学科は62.5で、経済学部経済学科は60.0のままで10年間推移しています。理学部が数学科と物理学科で偏差値が下がってきているのは気になるのですが、それ以外のところでは入試難易度はこの10年間で下がっておらず、健闘している大学だと言えます。入試難易度でみた場合、早稲田、慶應、上智の次に立教大学が位置していると思ってくだされればいいです。

次のグラフは河合塾の模試からみた立教大学文学部英米文学科合格者の学力分布の推移です。〔p.×資料３,④〕河合塾では全国的な模試を行っていまして、センター試験に対応した全統マーク模試と、個別試験に対応した全統記述模試をそれぞれ年に３回ずつ行っています。それでこのグラフは、立教大学文学部英米文学科の合格者のうち、第２回以降の全統記述模試を受験した人たちが、模試でどのぐらいの成績をとっていたかということを表したものです。横軸が偏差値で、縦軸が人数を表しています。先ほど英米文学科は、偏差値62.5でこの10年間は変わっていないと言ったのですが、実は合格者の成績を見ますと、10年前の1995年度と比べて、2005年度は学力分布のピークがかなり偏差値の低いほうに動いていることがわかります。上位レベル層はあまり変わっていないのですが、2005年度は学力的にかなり低い人たちが合

格しています。

それで、偏差値の高い人たちは国公立大学を併願していて、国公立大学に合格した場合はそちらのほうに入学してしまう可能性が高いです。そうすると、実際に立教大学に入学してくる層というのは、実は10年前と比べるとかなり偏差値の低い人たちが多くなってきていると言えます。入試難易度は変ってないけれども、合格者および入学者のレベルは、10年前に比べてかなり落ちてきているのではないかということが気になります。

それから、2005年度は2000年度比べると上がっているのですけれども、2000年度というのは、確か立教大学としては非常に倍率が悪かった年だったと思います。2000年度のように倍率が下がりますと、やはり合格者の学力分布も大幅に下がるということが実証されており、なんとか2005年度のレベルを維持していかないと、倍率が今後下がるようなことになれば、入学者レベルでさらに厳しい状況になってくるのではないかと思われます。

経済学部の合格者の模試からみた学力分布を見てみましても、〔p.×資料3,⑤〕上位レベル層はこの10年間で若干減ってきてはいますけれども、やはり気になるのが、分布のピークが偏差値の低いほうにかなり動いているということと、10年前と比べると合格者のすそ野が広がっていて偏差値の低い人たちがかなり多く合格していることです。

塾のチューターから見た立教大学

次に、河合塾のチューターから見た立教大学についてご紹介したいと思います。〔p.×資料3,⑥〕河合塾では、各クラス40人ぐらいに1人の割合で、進路指導だけを専門的に担当しているチューターという者がいます。高校のホームクラス担任だと思ってくだされればいいのですが、教科のほうはまったく教えていません。まず東京のチューターたちに、立教大学の良い点、悪い点をあげてもらいました。たとえば文学部ですと、「英語がしっかり学べる」ことが良い点としてあがっています。立教大学は全学共通カリキュラムで英語はとても力を入れられていると思うのですけれども、やはり英語教育が良く、しっかり学べるということはチューターもわかっているようです。しかし一方で、「学びの内容がよくわからない」、あるいは「特色がなく他の大学の文学部と変わりがないと聞く」と悪い点であがってきています。

社会学部については、看板学部と思っているチューターが多く、「教授陣が充実している」と言っている一方で、「学生自体にあまりカラーがない」、「学びの内容がよくわからない」という声もあがっていました。

それから、コミュニティ福祉学部については、「現場実習が多いので評判」とか、「基礎ゼミが充実していて福祉体験ができる」ということで、実習のことについて非常に評価しています。悪い点としては、「本当に介護・福祉関係の企業に就職がよいのか疑問」「学部の方向性や内容が明確ではないため、福祉関係以外の就職に不安」など、就職面での不安感を生徒が持っているということを言っています。

観光学部は、やはり立教大学のオリジナルの学部ゆえ、「専門的に学問に取り組める」とか、「特色のある学部なので目的意識を持った生徒には勧めやすい」とある一方、やはり今、「観光業界自体が不安」とか、「観光以外の就職に不利なのでは」との意見が多かったです。こちらの学部でも、就職面での不安感があるようです。

法学部は、「国際関連の勉強ができる」というところが良い点であがっていますが、一方で、「入試難易度が高いわりに司法試験合格の実績がやや低い」とか、「立教のイメージからすると影が薄い」という声があがっています。〔p.×資料３,⑦〕

それから経済学部は、「教授陣が充実しており、専門家のアドバイスが受けられる」とか、「ゼミが充実している」、「就職がよい」と思っているチューターもいれば、一方で、「可もなく不可もなくという感じ」、「“立教の経済”という独特のカラーがない」という印象を持っているチューターもいるようです。

理学部は、学生数が少ないということもあって、「研究室がよい」とか、「少人数制」というのが良い点としてあがっています。そしてこの点はとても難しいと思うのですが、「工学部系がないため、文系大学というイメージが強い」。また、「理学部だけなので、カリキュラムや設備などが心配」という声があがっていました。

全体としては、「かっこいい」、「おしゃれ」、「池袋という立地のよさ」、「就職がいい」、「伝統がある」、「語学は少人数でしっかりやってくれる」というところが良い点であがってきており、悪い点としては、「遊んでいる学

生が多いというイメージ」、「国際的なものばかりを取り上げている」という声が聞かれました。

このように、東京のチューター（＝生徒）に関して言えば、立教大学のことは良いイメージを持っているほうが強いかなという気がしました。ただ、教育内容についてはあまり具体的なことはあがってきていないなというのが一つ気になります。

次に、それでは名古屋や大阪のチューターはどう思っているのだろうかと聞いたところ、実は声がなかなか上がってきませんでした。〔p.×資料３，⑧〕面談のときに、生徒あるいは保護者から立教大学の名前があがってくるというのはないそうです。チューターのほうから、立教大学はどうかと聞いたときに初めて考えるというぐらいのようです。イメージとしては、「東京のおしゃれな、どちらかというとお坊ちゃま、お嬢様学校」、「就職はマスコミ関係に強い」、「観光学部や経済学部のイメージ」、「理系学部のイメージが薄い」、「入試では英語ができないと合格できない。大学では語学力がつきそうなイメージ」ということで、やはり語学力には定評があるようです。

また、明治大学、法政大学、中央大学と比べてどうかと聞いたところ、「男子生徒はどちらかというと明中法のほうが受けやすいと思っている」、「法学部だと中央大学、理系だと明治大学という、それぞれ売りがしっかりしている。そういった意味では、立教大学の位置取りは非常に曖昧ではないか」という声があがっています

以上のことから推察すると、入試難易度的には、早慶上智の次に位置していて良いポジショニングなのだけれども、大学の具体的な内容や魅力みたいなところは、残念ながら生徒にはあまり伝わっていないのかなという気がしました。

受験生が重視する志望大学決定項目

それでは、次に最近の受験生は志望大学を決定するときに何を重視しているかをご紹介したいと思います。〔p.×資料３，⑨〕河合塾では毎年３月に河合塾を卒業する生徒たちに、アンケート調査を行っています。そのなかで、志望大学決定で重視した項目は何ですかと聞いているのですけれども、10年前はやはり「入試難易度」が１位でした。次に、「学びたい学部、学科、専

攻」、３番目が「大学の知名度」という順でした。2005年度では、「大学の知名度」が１位で、「入試難易度」は３位に下がりました。

その他で10年前と比べて上がってきているのが、「就職実績」（10.4→14.6％）、「取得資格・免許」（11.1→13.0）、「カリキュラム」（8.5→11.5）です。就職実績はやはりここ数年就職が非常に厳しくなってきていますから、保護者の方も含めて大変関心が高いです。また割合はまだ少ないですけれども、カリキュラムというのが10年前と比べて、志望大学決定で重視してきているという傾向があります。その大学に入れば、どんな教育サービスを受けられるのか、どんな付加価値が付くのか、そのためにどんなカリキュラムが用意されているのかを気にするようになってきているということです。

さらにこの質問を国公立型生と私立型生に分けて集計しますと、国公立型生よりも私立型生の子たちが重視している項目は、大学の知名度、就職実績、歴史や伝統、交通の便、学生の雰囲気、カリキュラムです。〔p.×資料３，⑩〕これらの項目を見ますと、立教大学は就職実績もいいですし、歴史や伝統もありますし、交通の便もいい、それから学生の雰囲気もいいかと思います。これらの項目では、立教大学はとても有利だと言えます。しかし、カリキュラムという点ではどうかといいますと、先ほどのチューターの声を見ましても、具体的に全カリがいいという声は１人もあがってきていません。受験生が志望大学を決定するときにカリキュラムを重視する傾向が出てきている中、残念ながら立教大学の売りである“全カリ”は受験生には伝わっていないのではないかと思いました。

また、カリキュラムが10年前と比べて重視されつつありますが、割合にすればまだ１割強です。一方、先ほど芝の助川先生もおっしゃったように、実は高校現場で問題になってきているのは、なぜ大学に行くのか、大学で何をしたいのかということがわからないまま大学に進学している生徒さんが非常に多いことです。それで、高校の先生方は大変苦慮されていて、オープンキャンパスや、あるいは大学の先生の高校への出張講義が多くなっているのもその対処法のひとつです。

そういう意味では、立教大学のいろいろなことが学べる全カリはいいのですけれども、その前に大学に入ってきた学生たちに、何を学びたいのか、何を学ぶべきなのかという目的意識を持たせるための動機付けのようなプログ

ラムも必要ではないかと思います。全カリというメニューは用意されているのですけれども、実はそのメニューを有効的に学ぶための教育プログラムが用意されていないのではないでしょうか。そのために、従来型の一般教養と全カリがどう違うのか、いまひとつ見えなくなっているような気がします。テーマ別に履修するようになっていますが、また科目名が現代的なネーミングになっていますが、それ以上の違いがよくわかりません。大学生の現状を鑑みてもう一工夫、ふた工夫足りないために、全カリというのは業界では非常に有名だけれども、実際大学生は満足していないのではないでしょうか。そのために、高校生や高校の先生にも伝わっていないのなかという気がします。

今、数学や理科など教科における学力低下が問題になっていますが、それ以上に意識低下の方が問題だと思います。大学１年生のときに、学ぶことへのモチベーションをいかに持たせるかということが、大学にも問われてきている時代になっていると思います。

キャリア形成の視点から見た大学での学習

山口　どうもありがとうございました。特に最後にご指摘いただいた点、学生の意識やモチベーションをどうやって上げるか。導入教育というかたちで、立教大学も若干取り組もうとしているところがあったり、あとはカリキュラムを重視している学生が増えてきているというのは、立教大学でいろいろ工夫していることについて、ある意味評価をしてくれる学生が出てくるのではないかということで、期待したいと思います。また後ほどいろいろと教えていただければと思います。

それでは、シンポジストの講演で最後になりますけれども、株式会社リクルートの冨塚さんから講演をお願いします。それで、冨塚さんのほうには、キャリア形成の視点から見た大学での学習ということでお話をお願いしていますので、よろしくお願いいたします。

冨塚　皆さまこんばんは。４人目ということで、もうそろそろお疲れのところだと思いますけれども、最後ですので、20分ほどお付き合いいただければと思います。

私は1988年に法学部を卒業しまして、新卒でリクルートに入って、最初の13年は営業でした。企業の人事を訪問して、新卒の採用、中途の採用、教育の話をさせていただいていました。最後の３年が商品企画の担当でして、『リクナビ』や『就職ジャーナル』の商品開発と編集長をやっていました。各企業のトップの方、それから大手の人事部長さんなどと新卒の領域の話をさせていただいていましたので、そのあたりの話も含めてお話しできればと思います。

就業率の高い立教大学

まず最初に、データから多少お話しさせていただければと思います。〔p.×資料４,③〕今年の求人倍率は1.60倍ということでして、学生１人あたり1.6社から内定がもらえるという状況です。私が卒業したのが、左から２番目の2.48倍という年だったのですが、当時から比べると倍率が低いように見えるのですが、これは数字のまやかしでして、学生数が変わっていますので、当時の学生数で今の求人数を割り戻すと、2.61倍という倍率になるわけですね。ですから、学生が増えた分だけ倍率が減っているだけでして、企業のほうの求人ニーズは非常に高くなってきているというところです。

ところが、その実感値は学生のほうにはなかなかありません。〔p.×資料４,④〕なぜかというと、バブル期は人数を取るということが企業の人事のメイン課題でしたけれども、最近はいい人がいれば採りたいと。それだけ人数を採りたいのだけれども、基準に満たない場合には採用しませんという企業が増えているものですから、採用のレベルに満たなくても、求める人材のレベルは下げないと。逆に中途採用や、我慢させるというところがあるものですから、学生のほうからするとなかなか狭き門という印象になっているところです。

その結果はどういうことかというと、「無業者」。〔p.×資料４,⑤〕結局、卒業しても就業しないという人が、現状55.8％というところです。私のときには90％を超えていましたので、大学を出ても就職しない、就業しないという人がこれだけ多く出ているというところです。

立教大学はどうなのかという数字をおうかがいしましたところ、2004年度の就職率で69.2％、無業率で26.4％という数字ですので、他の大学に比べる

と、非常に就業率が高いというところです。

かつ26.4％のうち、進学者が5.7％、資格取得のために勉強している人が7.9％というところですので、単純にいわゆる就職ができないという学生数は、他の大学に比べると極めて低いのかなと思っています。

そもそもこのデータをとれている大学がほとんどなくて、私の知っている限りでは立教大学ぐらいではないかなと思います。我々の調べの55.8％というのは、学生に直接、『リクナビ』会員56万人からダイレクトにとっている数値なのですけれども、大学で押さえられているところというのはほとんどないものですから、進路指導に対する力の入れ具合は、立教大学は非常に高いなと客観的には思っています。

冨塚　優氏

企業が求める学生

では、企業側がどんな学生を求めているのかというところです。〔p.×資料４,⑦〕多少時代とともに変遷している部分と不変の部分と両方あると思うのですけれども、現状でいきますと、非常に変化が激しい環境のもとで、激しい競争を繰り広げていると。なかでもコストですね。コスト競争というものが非常に激しくなってきています。結果とすると、社員一人ひとりを教育する時間的な余裕、お金の余裕がなくなって、新卒採用で動いても、即戦力やプロフェッショナル性みたいなものが、どこの会社でもないよりあったほうがいいよねというレベルから、徐々に本当の意味でこのあたりが求められています。

私どものリクルートでも、新卒採用を250人ほどしていますけれども、特に私どもはネット系の事業に非常に力を入れているものですから、IT 系のスキルというと、中途採用で採るよりも、ネットに関しては学生を採用したほうが、非常に革新的な技術を持っている場合が非常に多いと。これは理科系というよりは文科系のほうに多くて、実際に学生でありながら実業でネッ

ト系の実業をやっている学生が非常に多いです。ネット業界においては、「○○君」と言えば、「ああ彼ですね、第一人者ですね」ということが、日常発生しています。我々の会社のなかでも、たとえば○○大学の○○君というのは、この領域において第一人者みたいなことがわかられているぐらい、逆に言うと人材の数が少ないというのもあるのですが、完璧にプロフェッショナルというところでの採用にもかなり力を入れられている企業が増えてきているということです。

これは私が当時、学生向けによく話をしていたのですが、学生が考える即戦力というと、〔p.×資料 4，⑧〕今まで学んできたスキルや知識をすぐに活かすことができるほど優れている人、技術がある人というとらえ方をするわけですが、一般的に、これは私どもの会社以外の各大手の人事責任者と話をしていても、口をそろえておっしゃるのは、変化をきちんと掌握できるとか、対応できる力をつけるために常に学び続けることができるということ。得たものをどう応用できるかということですね。このようなところが求められているわけですけれども、勘違いされるケースが、学生の間には非常に多いなと感じていました。

ということで、プロフェッショナルというと、〔p.×資料 4，⑨〕常に学び、スキルを身につけ続けている人ということでありますので、ラーニング・アビリティが非常に求められています。先ほどの IT の学生のほうが優れているということも、新しい技術革新みたいなことをどんどん学んでいく力というのが、中途の人よりも新卒の学生のほうが非常に学んでいるというあたりですね。会社に入ったあとも、そういう人のほうが学び続けられるという側面で、非常に使えるというような評価がされているというわけです。

期待される大学教育

では、企業側が大学の教育に何を期待しているかという話です。〔p.×資料 4，⑪〕これはもう10年ぐらい前から言われている話ですが、ソニーさんが最初に言われ始めましたけれども、学生時代に明確な問題意識、それから目標達成に努力した人は、再現性が非常に高い。これはトヨタ自動車の人事の方も同じことをおっしゃっていまして、ほとんどの企業で同じことが言われています。再現性ということですね。それから、どれだけ失敗したのか。

その失敗から何を学んで次にどう活かすことができるのかという力ですね。こういうようなところです。

最終的には、目標管理制度を入れている会社も多いというのがあるかもしれませんが、結局、目標達成意欲が低ければ、どんなことを任せてもなかなかそこへ向かってチャレンジできないというところがありますので、ベースの力として判断する部分、目標達成にどのように取り組んでそこを実現したのか。実現できなかったら、なぜ実現できなかったのかということを自分なりにちゃんとわかっている人。こういう人が非常に人気が高いということです。

ですから、内定を複数もらっている学生は毎年います。企業側は、単に優秀、優秀というのは学力で測っているわけではありませんので、人としてどうなのという部分プラス、うちの会社に合う、合わないというところで見ていますけれども、うちの会社に合う、合わないを通り越して、この学生は欲しいというのは、やはり重複するわけですね。その部分が、このあたりですね。どれだけ実現に向けて努力して、そこで何を得たのかということ。そういう人は、企業に入ってからの再現性が高い。このような意味合いで、人気が高い学生が出現してくるということです。

求められる“答を創造する力”

よく受験と就職活動をごちゃ混ぜに考える学生が非常に多くて、私も学生向けのメッセージを出すときに非常に苦労したのですけれども、どうもノウハウものというのが学生に人気が高くて、大学受験と同じように、何か方程式があって、それをクリアすると企業に入れるということを目的としてしまっている人が、昔からそうなのかもしれませんけれども、変わらず多いと。〔p.×資料４,⑫〕ですから、受験勉強でインプット能力は身につくのですけれども、これ自体、会社に入って役に立たないという話ではないのですが、やはりこれだけでは企業が求めている力には適さないと。我々が実業でやっている世界で言えば、答えがないわけですね。答えがないのですけれども、答えがないなかで自分なりに答えをつくっていくという活動をしているわけですけれども、学生は就職活動というのは答えがあるものだと思っていて、その答え探しにぐるぐる回っている人が非常に多いです。ですから、学生に

何がしたいのですかと聞くと、それを突き詰めてしまうと、結局答えが出なくて就職もできないと考えてしまう学生も非常に多くなってきているなと思っています。ですので、学生に対してよくメッセージしていたのは、答えを創造する力なので、正しいか正しくないかというのは、誰もがやってみないとわからないと。このような話ですね。

最近で言えば、楽天の TBS 株の買収問題にしても、ではそれが正しかったのか、正しくなかったのかは、三木谷さんですらわからないわけで、わからないけれども、自分たちでこういう方向に進むんだと決めたことが大切で、それをやり遂げようという力が大切だという話を、新入社員向けの研修でもよくしたりします。

面接で重視される学習歴

ということで、過去の企業というのは、年功序列、終身雇用でしたので、入社してくる学生のほうも、入ってしまえばあとはもう安心でしたということで、では、そこに入るためには、昔は指定校制度などというのもありましたから、有名大学に入ったほうがいいよねと。〔p.×資料 4，⑬〕そうすれば有名企業に入れる確率が高いよね、有名企業に入ればあとは安泰だよねという世界があったわけです。企業側も入るまでにどれぐらいの基礎能力があるのかというところで、偏差値が高い大学に入ってくれた学生のほうがはずれが少ないというところで、学歴、どこの大学なのかということを非常に問うていた時代がありましたが、徐々に、その大学に入って何を学んできたのかというような、学習してきたことを非常に聞くようなかたちになってきています。

ネットがかなり普及してきましたので、面接などでもこのようなことが聞かれたみたいなことが、すぐに出回るわけですね。以前、リクルートの人事部長が浦和レッズの大ファンだったのですけれども、彼がある日の夕方にレッズファンの学生と面接になって非常に盛り上がったという話で、べつに盛り上がったから内定を出したわけではないのですけれども、最終的に、君内定ねと言ったら、翌日の最終面接に 5 人入っていて、5 人中 4 人がレッズファンだったという、これぐらいの早い勢いで情報が回るわけです。となると、あそこの企業は学校名で採用しているなんてうわさが立った日には、上位校

の学生、偏差値の高い学校の学生のほうから嫌われるのですね。これは面白い現象でして、自分をそういう学歴でしか見ていない、そういう会社には行きたくないと偏差値が高い大学の学生ほど思うということがあるものですから、学校名を見ていませんよということを強烈に打ち出したりしています。ですから、１次面接、２次面接というのは、大手企業はべつに人事の人が面接をするわけではないので、大学の名前を伏せて面接官のほうにデータが回ってくるというところがありますから、そもそも学校名を見ない。見ると余計なことになるので見ないという構造も最近は増えてきています。

ということで、学歴というのは潜在的な資質を見ていましたけれども、学習歴というのは顕在化された資質。〔p.×資料４，⑭〕何をどう学んできたのか。そこで得た力は何なのかがわかりやすい。先ほどの即戦力というところにもつながりやすいということで、こちらのほうを見はじめている企業がかなり増えてきているという話です。

その顕在化された資質のなかでも何を見ているのかという話ですが、〔p.×資料４，⑮〕ベースでいわれるのが対人コミュニケーションスキルということで、一番右端ですね。ここがベースですと。それ以外にも、先ほど申し上げた真ん中のラーニング・アビリティ、継続して学習できる力があるのか。それと、一番重要だといわれるのが、課題設定を自分でできますかと。指示待ち族でいわれたことだけやるのではなくて、自分でものごとの現象をとらえながら、ここが課題ですねと。課題を解決するためにはこういうことをやったほうがいいのではないかということを、自分自身で設計できる力があって、判断をしたいという意志がある若い人を欲しいと。そういうところを見分けるためには、学習歴ということを質問していったほうがわかりやすいですねという話です。

コミュニケーション能力とは

次は、ベースとなるコミュニケーション能力の話です。〔p.×資料４，⑯〕私もよく面接に立ち会っています。毎年100人から200人ぐらいの学生と会っていまして、今のポジションでいきますと最終面接を担当するケースが多いのですが、最終面接になるとコミュニケーション能力に関して誤解する学生は減っていますけれども、たまに一次面接などに出ると、自己 PR してくだ

さい、「はい、私にはコミュニケーション能力がありまして」とアピールする学生がいるので、では、あなたはコミュニケーション能力とはどういう能力だと思うのと聞くと、「自分の思っていることを私はうまく伝えることができます」と答えるのですが、そもそもそれがコミュニケーション能力がないよねという話でして、相手が何を期待しているのかを理解して、それを言語化して、しかも言葉以外の態度なども洞察しながら、最終的にそれを相手にうまく伝える力であるということで、どちらかというと、うまく話してやろう、みたいな話術みたいなところに学生はノウハウ的に興味を示してしまうのですが、そういうことではないという話をよくします。

語学はツール

それから最近、バブル崩壊後に非常に増えていますが、TOEIC など語学力があるほうが就職に有利だということで、サークル活動よりもダブルスクールに通って、TOEIC のスコアで高い点を取ったほうがいいということで一所懸命頑張る学生が増えているわけです。〔p.×資料 4 , ⑰〕これはホンダが言っていますが、結局、英語力というのは一つの手段であって、どう生きたいのか、どんな仕事をして社会に貢献したいのか。できることよりも意志であると。あくまでも語学というのはツールにすぎないわけで、パソコンと一緒ですよね。IT もツールである、道具であると。道具を何のためにどう使うかということをしっかり考えられている学生でないと、採用しにくいですねと。リクルートなんて語学力は全然必要のない会社なのですけれども、最終面接で面接をすると、やはり TOEIC900点以上の学生が本当にごろごろいるのですね。ただし幸いなことに、僕が面接する段階では、なぜそれを取りにいったのかということをけっこう説明できる学生が多くて、それをどう使いたいのかというのは、べつに語学を使いたいわけではないですよというタイプの学生でないと、やはり丸はつけにくいなと思ったりするのですが、こんな傾向です。

求められるロジカル・シンキング

あと、これは理系の学生は非常にロジカル・シンキングができるという話ですが、最近はやはり文系にも同じようなことが求められます。〔p.×資料

4，⑱〕仮説を立てて実行してみて、それを検証してというサイクルで仕事は回っていきますので、このような力が非常に求められているなと思っています。

学生と企業との大きなギャップ

これはちょっと細かくて申し訳ないのですが、学生が考えていることと企業が求めていることというのは極めてギャップがありまして、学生アピールの一番トップはアルバイトの経験で、55.5%。２番目に人柄で、３番目がその会社への熱意と言っています。〔p.×資料４，⑲〕企業側は人柄、その会社への熱意、今後の可能性と。やはり即戦力化を求めているものの、伸びしろがどのぐらいありますかというところを見るわけですね。ですから、ポテンシャルという言い方になっていますけれども、学習歴を見ながら、この学生だったら今後も継続的に伸び続けるであろうというあたりですね。このあたりをポイントにして見ているのですけれども、学生はやってきた経験だけを語って、そこの背景にあるところが弱いかなと感じます。

それから、『リクナビ』の会員に、どんな仕事に就きたいですかというアンケートをとると、「多くの人と接することができる仕事」、「周囲と協調し協力し合って進める仕事」に就きたいと言っています。〔p.×資料４，⑳〕一方、創造性みたいなところですね。「前例のないことに取り組む仕事」、「複雑な課題を考え分析する仕事」。企業側はこういう仕事に就いてほしいと思っているのですが、学生のほうはそちらのほうにはあまり興味や関心がない。ですから、このあたりのギャップも非常に大きいのかなと思っています。

ちなみに、協調性や多くの人と接する仕事をしたいと言っておきながら、社会人に、多くの人と接するとか、協力し合うというのはどれぐらいですかと聞くと、100人とか500人とか1,000人という単位で答えが返ってくるのですが、学生の平均値は17、18人です。自分のコミュニティが狭いものですから、10人以上は多く感じてしまうというギャップもあったりします。

それから、仕事の中身をイメージでとらえている部分がまだまだ多いですね。〔p.×資料４，㉑〕先ほどの先生のお話ではありませんが、中学生、高校生のときから、仕事を選ぶとはどういうことなのかということをよく理解していないと、非常に誤解があります。やはり私どもの会社もそうですが、い

ったんは営業で現場を経験させたあとに、その人の適性やもろもろの要請によって人を送り出すということをやっているわけですが、商品企画・プランニングというのは、マスコミに取り上げられやすいということで、非常に人気が高い。営業は、不必要なものを人に無理やり売りつける悪い仕事なんて言われてしまう。ただし、営業をやると言わないと会社に受からないということで、無理やり営業志望ですと言っているのですけれども、根っこは全然違うという状況もあります。

非常に重要なやりたい意欲

やはりやりたい意欲という部分が非常に重要なのではないかと思っています。〔p.×資料 4 , ㉓〕なぜこれをやりたいのかというのは、経験や能力からこういうことをやっていきたいとなっていくといいのではないかと思っています。

高校生までは、最近は先ほどのお話からして、やるべきことがだんだん減ってきている気がするのですけれども、どちらかというとできることを大きくしていって、まだやるべきことの円のほうが大きい。〔p.×資料 4 , ㉔〕大学生というのは、自分はこういうことをやってみたいと。できることとやるべきことのなかで、できることの円を増やしていって、やりたいことに近づけていってほしいと思います。どちらかというとマストをこなすという学生になる確率が非常に高いなと思っています。

これはべつに立教大学に限った話ではありませんが、私の希望で申し上げると、どちらかというと目標を山の頂上と見据えたときに、山登り型で、まずここまでクリアして、次はここをクリアしてという教育が非常に多いと思うのですが、実際の実業の現場で言えば、激しい変化の急流のなかに放り込まれているようななかで、必死になってぶつかって転覆しないようにという勢いのなかで何を使うのかということのほうが、非常に重要だと考えています。〔p.×資料 4 , ㉕〕私自身も自分なりの目標を立ててはいましたけれども、どちらかというと現場の流れのなかでつかんでいって、それを次の目標にしていくと。ですから山登りだけではなく、ラフティングも必要ですし、ラフティングだけではだめで、やはり山登りも必要だと。この 2 つを考え合わせていただければなと思います。

学んだことを生かせる教育体制を

最後に、立教大学にということで私なりに考えたことで言いますと、僕は法学部だったのですけれども、では会社に入って何が役に立ったのかと。法律を仕事にしているわけではないので、何が勉強になったかというと、法学部の答案の書き方といいますか、結論はこうです、なぜならば過去にこういうような判例があって、こういう説がありますと。でも、私としてはこう思うのでこうですという論文の書き方というのですかね。そういうことが非常に仕事に役立っています。皆さんもそれぞれ自分の学部があると思うのですが、そのように、学んできたことをどう自分の仕事に転用するかみたいなことですね。

今は会社のほうでも、どちらかというと大学というよりも、進んでいる企業になりますと、どこの高校の出身なのかと。高校の名前を見て、高校の偏差値を見る。よく人事の人が使う言葉ですけれども、「地頭」がいいのかということですね。今の大学の入試はあてにならないので、高校の学力のほうがあてになるだろうというようなことをおっしゃる企業の人も最近はたくさん出てきています。

先ほど、全カリはどうこうという話もありましたけれども、大学で学んだことをどう活かすのかというところまで踏み込んだ教育体制があると、非常にいいなと思っています。すみません、ちょっとオーバーしましたが、私の話を終わります。ありがとうございました。

山口　どうもありがとうございました。では、これで10分間休憩を入れまして、そのあと檜枝センター長のほうから、４人のパネリストの講演についての検討をいただきまして、そのあとディスカッションに入っていきたいと思います。

（休憩）

大学教育開発・支援センター　開設1周年記念シンポジウム
外から見た立教大学－ミッションと社会的要請－
2005年11月24日（木）

第二部　パネルディスカッション

山口　第二部では、最初に大学教育開発・支援センター長の檜枝先生から、４人のシンポジストの講演を受けまして、指定討論ということでお願いいたします。よろしいでしょうか。

檜枝　４人の先生方のお話は、なかなか耳の痛いお話が多かったのですけれども、これからの立教大学を考えるために大変有益な情報をいただいたと思いました。最初の小林さんのお話を聞いていて、「情報」と「外国語」、確かについこの間までそんなことを言っていたことを思い出しました。今は「補習」と「就職」、私たちもこれから検討すべき課題だと思いました。

助川先生からは、高校との連携を生徒を介したものだけではなくて、高校の先生方との連携も深めるべきだと。それから、立教大学が何を目指しているのかということを、もっとわかりやすくしなければいけないというお話をいただきました。

滝先生のお話で印象的だったのは、入試難易度というのは実はまやかしで、入学者の偏差値を見なければいけないという点です。入学者は合格者の分布でいえば下の方が多いので、私たちが相手にしている学生の偏差値的な学力は下方にあるということを認識しました。

冨塚先生からは、企業が求める学生の資質ということから、立教大学がそういうものにどのようにして応えていくのかということの指摘がありました。

私は先生方からどのようなお話をうかがえるのかわからなかったので、私なりに立教大学の教育について考えていることを、事前に簡単にメモにしてきました。このメモにしたがってお話ししたいと思います。

立教大学のいいところ

私も立教大学の卒業なのですが、まず申しあげたいのは、立教大学というのは本当にいい大学だなと、毎年毎年深く思うようになってきているということです。現在も立教大学の教員をやっているので、バイアスがかかっていて、立教大学がいい大学だと思うような構造になっていますので、割り引いて聞いてください。

そこでいつも思うのは、年々いいと思うようになってきた立教大学の何が

本当にいいのだろうかと考えると、説明がなかなか難しい。確かに滝さんのお話にあった河合塾のチューターの方が言っているようないろいろな良さはあります。こういうものが雰囲気や文化というものなのかなと思っています。これらを活かせば、もっと具体的にいろいろな展開ができるのかなと思っています。

例えば、立教大学のスローガン。「自由の学府」、「リベラルアーツ」、「専門性に立つ教養人の養成」、「道を伝えて、己を伝えず」、「自由の学府、未来を拓く」、「自由の体感、共創へのステージ」。最後の３つは名刺のロゴの下に書いてあった標語なのですけれども、こういうものを見ると具体性がなくて迫力がないなというのが私の印象です。

次に、校歌『栄光の立教』の２番の歌詞。「愛の魂、正義の心、朝に夕べに鍛えつ練りつ、邦家に捧ぐる我等が母校、見よ見よ立教、自由の学府」ということですね。これは「愛の魂」と「正義の心」を持って、「邦家に捧ぐる」を自分のためではなくて、人類に対して奉仕するという意味にとれば、すばらしいことを目指している大学ですね。立教大学というのは、やはりなんといっても自由の学府、自由という言葉が一番の売りかなと思っています。ここでいう自由というのは、束縛からの自由とか、権威からの自由ということなのですけれども、実はこういうものからの自由というのは、極めて強い「個」、個人によってのみ支えられます。このような教育を本気でやろうと思うと、我々教育者としては厳しい努力が必要だということです。

求められている教育改革への意識の共有と実践

こういう漠然としたことしかお話しできないということは、実は立教大学の良さを言語化して共有化して、それで教育改革を実現するということに関してのサイクルがちゃんと回っていないのだなと思っています。

国立大学が独法化に際して、理念、目的、目標をしっかり書いて中期目標をまとめ、それを達成していかないと運営費交付金に響くということで、かなり本気でやっています。これは上層部だけかもしれませんけれども、少なくとも大学という組織体としては非常にしっかりやって、それを発信しています。私も理学部長になってから、ほかの大学のホームページなどを見ると、国立大学は極めていいことがきちんと整然と書かれていますね。こういう点

檜枝光太郎センター長

に関しては、立教大学は完全に出遅れていると言わざるを得ないと思っています。

それで、外から見たらどうなのかということですけれども、一つ資料を付けておきました。山岸駿介氏の「全カリに見る大学の“魂”」です。この記事では、立教大学の全カリが実現したのは、「伝統の力」と認めています。私たちがちょっと忘れかけているものを外から見てきちんと評価してもらっています。これを読んで、立教大学というのは底力があるのだなと思いました。ただ、底力というのはなかなか目に見える具体的な結果にならないところが弱いのかなと思いました。

次に、立教大学の教育の目指すものについてお話します。これは私が考えるもので、センターなどの組織的なものではありません。４つ挙げています。一つは、「学生が主役の大学」、これは早稲田大学も言っています。次に、「キャンパス全体で教育しましょう」ということです。それから、「顧客満足」。最後は、私の思っている育成したい学生というのは、「持続可能な社会の実現を目指して自立した個の育成」です。

一番大切なキーワードは、「学生が主役の大学」ということです。教員が教える大学から、学生が学ぶ教育へということです。学生参加型の教育の工夫ということです。「半学半教」という言葉も書いておきましたが、これは実は慶應が言っていることです。今風に言えば、教えるということが最も質の高い学習に結びつくということです。そういうような、学生がもっと能動的に学ぶという場面を大学内外につくっていかなければいけないのではないのかなと思います。そういうことをやれば、冨塚さんがお話しになったような、社会に出ても自分で学び、自分で課題を見つけて解決していけるような学生が育つのかなと思っています。

それから、「キャンパス全体で教育」というのは、もう教室だけで教育するというのでは不十分だということです。大学を構成するすべての構成員、

つまり教員、職員、学生があらゆる面で教育し合うことが必要なのではないかと思います。さらに、キャンパスだけでは狭いので、やはり社会との連携ということで、コオプ教育というようなことを考えていかなければいけないのではないでしょうか。

「顧客満足」というのは、わざとこういう言葉と使いました。大学の人はあまりこの言葉は好きではないのですが、こういう考え方をすることが必要なのではないかなという問題提起です。私が思っている顧客満足というのは、学生が社会で生きていくための基礎を大学でつくるということです。学生は21世紀知識社会で、卒業後60年ほど生きていくわけですけれども、その人生の終わりで、やはり立教大学で学んだ４年間が自分の人生の基礎をつくっていたなと思うことが、本質的な大学の顧客満足だと思っています。

なぜこのようなことを思うようになったかというと、2004年３月まで私は５年半ほどキャリアセンター部長をやっていた時の経験です。就職活動の際に、大学で勉強もクラブ活動もしない学生がいろいろと迷っているのを見ると、大学はもっと学生を教育してほしい、鍛えてほしいと切実に思いました。

顧客満足ということでは、先日、金沢工業大学に行ってお話をうかがって、非常に感心しました。それは、シンガポールの刑務所の顧客満足というのは何かということです。刑務所には二度と戻ってこないということが刑務所の究極的な顧客満足だということです。もちろん刑務所内をよくするということもあるのですけれども、刑務所を出ていって社会で生きていくための就職斡旋やフォローが非常に大切な顧客満足に結びついているということです。

この例を大学に当てはめるのは問題かもしれませんが、我々も大学を出てから一生の間で役に立つような基礎を学生につくっていきたいなと思っています。

最後に立教大学では教育改革に大学全体で取り組んでいる意識がまだ非常に薄く残念に思います。教育改革が大学生き残りに必須であるという意識を共有して実践していくということが今求められていると思います。その発信地に、本センターがなれるように努力していきたいなと思っています。

以上、私が日ごろ考えていることを簡単にお話しいたしました。

立教大学が目指すものは？

山口　どうもありがとうございました。

今、特に最後のところで、立教大学の教育の目指すものということでのお話がありました。ちょっとこれを受けて、先にシンポジスト 4 名の方に話を受けての回答、もしくはちょっと限られた時間のなかだったので、しゃべり足りなかったところがあるかもしれませんので、簡単にひと言ずつお願いしたいと思います。特に今回のシンポジウムで言うと、ミッションと社会的要請ということもあり、今センター長が最後のところで指摘した立教大学の教育の目指すものというところに少し焦点を当てたかたちでお話ししていただければと思います。では、順番によろしいでしょうか。

小林　ちょっと先ほどふれなかったことで、教育が目指すものということになるかどうか甚だ自信がないのですが、立教大学を外から見たときに、他大学と比べたときに、私が一番感じたのは、非常に俗っぽい言い方で言うと、スターがいないなと。スターというのは、マスコミによく出るという意味も含めてということと、それから非常に論文を多く書いていらっしゃる先生方も引っくるめて、「立教大学の○○先生」というところがなかなか見えにくいなというのがありました。斎藤精一郎さんという社会学部の先生がいらしたのですけれども、ほかの方がなかなか、どのぐらい活躍されているのか、発信されているのかというのが、外から見てちょっとわかりにくいということがありました。まずそれが一点です。

それから、先ほどちらっと出た全カリなのですけれども、これも先ほどちょっとふれた、大学そのものが何を目指しているかというのが今ひとつ見えてこないかなと。本当に東大型のようなことを目指すのか、リベラルアーツを目指すのか、具体的なところがよく見えてこないということがもう一つありました。

最後に一点だけ、これはよくミッション系の大学で見られるのですけれども、「英語の○○」、これはたとえば「英語の南山」とか「英語の立教」とか「英語の上智」とか、必ず名前があるのですけれども、ここの差別化みたいなもの、区別化と言いますか、「○○の立教」といったときの教育の内容がちょっと見えてこなかったかなと。そのへんの目指すところをもう少し伝えていただければなと思います。ちょっと回答に沿えなかったかもしれません

が、すみません。

山口　どうもありがとうございました。では、続きまして助川さん、お願いします。

都会的な首都圏区の大学

助川　先ほどからお話が出ている特徴なのですけれども、これは中学高校だって同じなのですよね。一つは大学に入れるかということでランク付けされている。それでは、そういう学校がみんな同じなのかというと、実はよくよく考えていくとそうではない。先ほど立教大学というのは、明治、中央、法政から比べると、もう一つ入りたい、あるいは入るための枠のなかに入ってないのではないかというお話がありましたけれども、これはべつに悪い意味ではなくて、私などは立教大学というのは全国区の大学ではないと思っているのです。それでは何かというと、首都圏区なのですね。そこにいいところがあるわけですよ。明治、中央、法政がなぜ全国区かというと、いわば泥臭いのですよね。これは私の印象ですけれども、そのぐらいだったら地方からの人が入れる、入っても付き合っていけるのが多いだろう。だけれども、立教大学というと、何か変にしゃれていて、都会的に洗練されているというイメージがある。このイメージというのは、逆に大事にしたほうがいい。要するに、青山学院や上智もそうなのですけれども、そのイメージというのはやはり首都圏区の大学ですよね。だから、地方に行けば、今、早稲田、慶應、上智なんて並び称されているような感じだけれども、地方の人からすれば、「なんで上智なんか行くの」と。首都圏だと、たとえば早稲田や慶應を振って上智に行く場合はあるのです。でも、地方からすれば、なぜそんなことを考えるのかわからないと。それと同じように、首都圏区の大学であるということのメリットというのをどれだけ活かして引きつけていけるのかということなのですね。

私は現在の先生方、学生の皆さんが一所懸命やっていることが私自身つかめていないと思いますので、だからこそ余計に生意気なことを言っていますけれども、リベラルアーツということで言うのだったら、それをできるだけ具体的に発信していく必要がある、と思います。

では、具体的にどうなのかというと、たとえばICUの場合だと、あそこ

は教養学部しかないのですよね。法学部やそういう学部がないわけです。立教大学は、では今から全部壊してなんていうことは無理なのですから、一つとしては、やはりモデルケースをつくってもらって、たとえば今、弁護士や公認会計士を育てるためのコースをつくっていらっしゃる。だとするならば、では弁護士で、ただ単に法律だけをやればいいのかという問題があるわけですよ。その他に、やっていたほうがよりプラスになる学問の道筋を学生に示す。たとえば理科関係ができなければだめなんだよ、自然科学をある程度理解していないと弁護士なんかできないんだよ。それだったらこういう学問分野を勉強しなさいとか、あるいは、法学部に偏ってしまいますが、弁護士は今一番注目だけれども、もっと言えば弁護士は増えている。弁護士で食べていけない人が出てきている。そのなかで、プラスして英語ができる、国際法などを学んでいるという人はものすごく売れているのです。そういうことをモデルケースとしてちゃんと示してやることによって、このリベラルアーツということを活かしていくことが、首都圏大学として、立教大学としてそれなりのスタンスをつける道筋の一つだと思います。そういう面で頑張っていただきたいです。

山口　ありがとうございました。では次に、滝さんお願いします。

教育力が問われるリベラルアーツ

滝　先ほど檜枝先生のほうから金沢工業大の話が挙がったのですけれども、金沢工業大の大学改革の出発点は、10年以上前に行ったアメリカの大学の調査だと聞いています。金沢工業大の先生たちが、MIT やスタンフォードなど非常に有名な大学に研究体制など研究について聞きに行ったのです。しかしそのときアメリカの大学の先生たちに、「あなたたちは大学の先生なのでしょう、なぜ研究のことばかり聞くの、どうして教育のことに関心を示さないの」と言われたそうです。こんな世界のトップ大学でも、実は教育をとても大事にしているということにショックを受けて、それから教育付加価値というのを標榜するようになったと聞いています。リベラルアーツといえば、私はアメリカがモデルになっていると思うのですけれども、そういった意味では、やはりリベラルアーツというのは教育力ではないかと私は理解しています。

それでは、立教大学の“全カリ”すなわちリベラルアーツとはどのような教育力なのでしょうか？“全カリ”というのは実は先生方の視点でつくられているのではないか、学生のことをどの程度考えているのだろうかと疑問に思います。たとえば学生による授業評価にしても、2004年度から取り組んだということで、全カリと言っているわりには遅いなと正直思いました。

やはりこれから大事なのは、学生が主役の大学。まさに先生が書かれている、学生が学ぶ教育へ、学生参加型の教育の工夫ということで、リベラルアーツを標榜するのなら、やはり教育力が問われていると思います。

それで今、助川先生から、立教大学は首都圏の大学でいいのではないかとありました。全国区にするか首都圏型の大学にするかというのは、大学の方針としてとても重要な決断だと思います。河合塾では、全国の校舎で受験生向けの大学ガイダンスを行っています。受験生のニーズが高い大学にお願いしているのですが、上智、ICU ならば、首都圏以外の校舎からも要望があります。また、生徒との受験校決定の時の面談の時にも名前が挙がってきます。しかし、立教大学に関して言えばガイダンスの要望もなければ、面談の時に名前も挙がってきません。先ほど立教大学は底力があると言われましたが、それをどう活かすかが問われていると思います。まだ活かされていないような気がします。そのために、残念ながら全国区になれないのだと思います。立教大学がリベラルアーツを標榜するのならば、やはり教育力で、ICU と並ぶ日本の私立大学トップの大学になってほしいと思います。そう意味での全国区の大学になってほしいです。

山口　ありがとうございました。では、最後に冨塚さん、お願いいたします。

大事な“ビジョン”

冨塚　すみません、私は専門家ではないので難しい話はよくわかりません。僕は立教中学からなので、非常に立教が大好きで、立教はいいなと思っていまして、人から言われても、いやいい学校だよという話をよくします。僕なりに思うのは、結局、先ほどの河合塾のデータを見ても、大学の選ばれ方というのはイメージですよね。では、いいイメージがあればいいのではないかというのが、ベースで思ってしまうことなのです。なぜかというと、企業側

がその学生がどこどこ大学ですと言ったときに、多くの人が、この大学だとこういうタイプの学生だよねというイメージでとらえるわけですよね。これはやはり消えないなと思っていまして、逆に言うと、一朝一夕でつくれるものでもないなと。では、立教出身者が集まって、立教は何がいいのかと言うと、口をそろえて言うのは、「人がいい」とか、「学生に悪い奴が少ない」とか、「先生がいい」とか、「雰囲気がいい」という、勉強やカリキュラムがどうのこうのというよりは、そういう話に終始するなと正直思っているのですね。

今、僕らは自分たちの事業もそうですし、よく出てくる話が、ビジョンという話なのですね。事業を運営していくにあたって、どんなビジョンで、ミッションステートメントを何に置いてやっていくのですかというところが、そのビジョンがしっかりしていないと事業経営ができませんという話がよく出てきます。リクルートという会社は事業が強いので、事業部ごとにビジョンを掲げて、そこに向かってやっていった結果として利益がついてくと。ビジュアリーカンパニーになっていかなければいけないと。ビジュアリーカンパニーといわれるところの多くはビジョンがしっかりしていて、すべてがそこに帰結しています。

では、大学のビジョンとは何ですかというところかなと思っていまして、先ほど檜枝先生は抽象的とおっしゃったのですが、逆に言うと、まさにこの学院歌のところにビジョンが出ているのではないかと思っていて、これはこれでいいのではないかとすごく思います。

具体的にという部分が肝心だなと思っていて、ではそのビジョンを目指すために、具体的にどのようにやっていくのかというところの接続が弱いのかなという気が正直しています。これは事業運営でもそうです。そこを目指すときに、やはり事業の場合には競争相手がいるわけで、ではうちは何を競争優位におくのかというところは、我々は常に考えているわけですけれども、大学も経営ということを考えたら、では先ほどのミッション系の大学で青学と上智と、何を立教の競争優位に置くのですかというビジョンからもっと引っ張ってつくっていけばいいのではないかなとも思います。そういうことは、社会学部や経済学部の教授の専門領域だとだと思うので、3C のフレームに落として、立教の競争優位とは何ぞやというのを皆さんで考えられるような

研修等をやられるといろいろアイディアが出てくるのではないかなというのは、素朴に思ったりするのですね。

なぜならば、我々はメンバー一人ひとりに、ではリクルートの競争優位とは何か事業ごとに全員に考えさせますし、そこで出てきたものをビジョンとして掲げていきます。

一方、やはりOB、OGもたくさんいるわけですから、彼ら彼女たちが立教の良さとは何なのだろうというところを集めてみて、そこからビジョンを作成していくというのも一つではないかなと思ったりしています。

やはり強い企業というのはビジョンがしっかりしているという話ですから、強い大学とは何かということがありますけれども、いわゆるいいなと思われる大学にはそういうビジョンがあって、そこのビジョンに集ってくる高校生みたいな人たちを集めて、さらにその強みをもっともっと伸ばしていけばいいのではないかなと思ってしまいましたというところです。

山口　ありがとうございました。今、4人のパネリストのなかから出てきたこととして、立教大学はもともと目指しているところがはっきりしないということは、一つ共通して指摘されたことではないかと思います。それで、ちょっとここからフロアの方を交えたかたちでディスカッションを進めていきたいと思います。フロアのほうで、ぜひ、ひと言言いたいという方、挙手をお願いします。発言の場合、所属とお名前を先に言っていただいて発言していただければと思います。どなたかありませんでしょうか。遠慮なく、お願いします。

失いたくない立教らしさ

会場 1　文学部史学科四年の学生です。本日は貴重な講演をありがとうございました。

先ほどから立教についてうかがっていると、具体的なものが見えないとか、いろいろなところで全カリもいいのだけれども、それが伝わっていないということがあったのですけれども、これはミッション系の大学の特徴ではないかと個人的に考えていて、外に対して宣伝していくということがすごく少ないのかなと感じでいます。明治学院大学もそれを感じられて、ブランドをしっかり管理していこうということをやられているのですけれども、ミッション系で学んできて大学のなかでのあり方などを考えてみると、本当に宣伝ばかりするのが本当に立教らしさなのか、ちょっとずれてしまうのではないかと思います。先ほど全国区になったほうがいいということがありましたが、本当にそれはそうなのかなと。立教らしさというものがなくなってしまうのではないかという気がしているのですが、そのへんで何かご回答をいただければと思います。抽象的ですみません。

山口　パネリストの方、いかがでしょうか。

教育力を基に大学の PR を

助川　本来であれば滝さんから何か聞ければと思うのですけれども。学校というのは、滝さんのおっしゃるように教育力なのです。これは中学、高校、大学、全部同じです。先生がどんな立派な研究をしようが、学生をちゃんと育てていないということになれば、これは意味がない。学校が学生を育てる、育てた人たちが社会貢献をしていく。そのことによって大学の存在意義・評価が広がっていくわけですよね。

宣伝というのは立教にふさわしくないのではないかという今のお話で言えば、もともと何もやっていないというところで宣伝だけをしても意味はない、しかし、きちんとした教育力。こういうかたちで生徒を、学生を育てていると。そのことはちゃんと言ったほうがいい。そういえるためにも、教育力というのは絶対に必要だし、自分のところが何をやっているということをはっきり外に向かって言うというのは必要だと思います。

ちょっとつまらない宣伝をするようですけれども、実は私が学校の説明会

を校長としてやるときに、不登校の生徒が何人いますと。去年は何人いました、今年は何人ですと言うのです。何故かというと、もちろん事実として不登校を放っておくなら別ですが、しかし、自分のところはカウンセラーがいて、それも常駐していて、スーパーバイザーがその上にいて、こういうふうにやっているということを言った上で、不登校の生徒が何人いますということははっきり言います。いいところと悪いところの両方を知っていてもらって、それでわかって入ってもらいたい。偏差値だけで選んでもらいたくないということで、私は逆に宣伝する。とするならば、こういうことを学生にやって、こういうように育てていると言えるところまでもっていくのが教育力であると思うのですけれども、よろしいでしょうか。

山口　滝さん、お願いします。

教育内容に満足される大学へ

滝　私が言っている全国区というのは、立命館大のように全国から受験生を集めるということではありません。立教大学に入った学生さんたちが、立教大学の教育内容に満足して、そのことが母校の先生や後輩の高校生たちに伝わるということです。その結果、全国の受験生から教育力の良い大学として名前が挙がってくるということが大事だと思います。お坊っちゃんという都会的なイメージがあるから、結局は自分には合わないので受験しないけれども、大学の教育内容からみて志望校として検討する大学に挙がってきているというのが大事だと思います。確かにブランドイメージは重要ですが、ブランドイメージだけではいずれ大学も通用しなくなるような気がします。たとえばウォークマンと言えば、ソニーだったのですが、今は i-pod に凌駕されています。大学もブランドイメージだけでなく、中身が問われる時代なってくるのではないかと思います。

会場 1　ありがとうございました。

生き方や価値観を持てる教育を

会場 2　立教大学総長室の職員です。檜枝先生の資料のなかに、「大学の“魂”」というのがありました。山岸先生が書かれているのですけれども、今、大学は人間の生き方や価値観を持った教育を授ける力が非常に欠けていると

思うのですね。立教大学が明治の初期にできましたときは、世の中は富国強兵で、そういう損得の世界の中だけでは人間は幸せになれないということがあって、バイブルを使いながら、聖書を基本にして、生き方を考えながら世の中で活躍してほしいという思いがあってつくられたと僕は思っているのですね。

それで、先日、聖公会のアメリカの総裁主教がおいでになって、ハーバードを出ているのですけれども、ハーバードでも倫理規範を持った学生がなかなか育たなくなったと。それから、上智大学の元学長のヨゼフ・ピタウ大司教に、経営学部をつくるための講演に来ていただいたのですが、キリスト教の倫理に基づく教育をするべきだと。日本は教育が整っていて、非常に世界に誇れる部分があるのに、自らそれを壊そうとしているようなものだと。少なくともミッション系の大学はそういう動きは壊さなくてはいけないと。僕は気持ちとしてはまったく同じなのですね。そのへんのところで、今の損得が中心になっている世界だからこそ、立教もミッション系も全部含めて、倫理観を教え込んでいきたいと思っているのですが、全国区にならないのはどうしてなのか、僕は非常に疑問に思うのです。なんとかそれを伝えていきたいなと思っているのですが、何か答えがあったらお聞きしたいなと思います。

山口　では先に檜枝先生、お願いします。

難しい倫理観の持てる教育

檜枝　大学教育として倫理観を持った人間を育てるということは、どこの大学でも必ず言うポイントだと思います。だから、それを実際に教育の場でどうやって実現するか。倫理観という非常に難しいものをどのように学生に身につけてもらうかという具体策がないと、水かけ論になってしまいます。

それで、私も今、学部長という立場でおりますし、押見総長は保証人の前で、立教大学の教育は「愛」というものが基本的な考え方だというお話をされます。その話を聞いて、私は理学部長の立場として非常に困ったなと思います。というのは、私たち現場の教員は、「愛」を学生に教える手段を持っていないのです。同じように、倫理観というのをどうやって大学教育のなかに埋め込んでいくのか。これは課題がわかっても、具体的になかなか実現できないことだと思うのです。立教大学を巣立つ人間というのは、広い知識、

専門性だけではなくて、やはりミッションスクールである以上は、倫理観を持ってほしいと、私も本当に思っているのですけれども、悩みが深い課題だなと思っています。

これはたぶん大学外の方からは答えがもらえないものだと、私は固く固く信じています。だから、この課題の解決策を一緒に考えましょう。

宗教系大学の良さを見直しては

小林　私はむしろミッション系というところをもっと強調してもいいのではないのかなと思います。日本には宗教系の大学が、仏教を含めてたくさんあります。カトリック系もあります。ところが、では実際に学生が入学するときに、たとえば熱心なキリスト教徒や仏教徒というわけでは、必ずしもないわけですね。むしろこの時代だからこそ、たとえば聖書の教えというものをもっと教育に取り入れて、宗教教育というわけではないのですけれども、立教大学の成り立ちを考えたときに、ではどういう教えなのか。先ほど「愛」という言葉があったと思うのですけれども、たとえば聖書の授業を全員必修にしなさいということも、もしかしたら考えられるかもしれませんし、聖書を読むということも一つの方法としてあるかもしれません。

大学をずっと見てきたときに、わりと宗教系の大学というのは、仏教系の大学も含めて、あまり宗教系ということを表に出さなかった傾向がありました。僕は社会が渾沌としているこんな時代だからこそ、宗教の教えの良さ、特にミッション系は聖書の教えというものを立教大学ならではのというものを、僕はもうちょっと出してもいいのではないのかなと思います。確か私の記憶するところでは、1960年代、1970年代の明治学院さんや立教さんや南山さんというのは、聖書の授業が一部必修化されたころがあったと思います。それを選ぶのはもちろん学生さんですし、カリキュラム上いろいろ議論はあるかと思いますけれども、僕は宗教系というところの良さをもうちょっとカリキュラムで、人を育てるというところでは出しても、見直すという言い方は大変失礼なのですけれども、逆に出してもらいたいなと考えています。

山口　ありがとうございました。

私のほうから、お二人のシンポジストはOBなのでおうかがいしたいのですけれども、今の話というのは、ある意味正課の、いわゆる授業内の教育だ

けではなくて、全学的な意味での、立教大学の生活を含めたかたちでの教育のなかでも起こりうるというか、教育できることなのではないかと思うのですけれども、立教大学で過ごされたということで、そのへんについてのことをコメントいただければと思うのですが、いかがでしょうか。倫理観等含めて、キリスト教系の大学として、いわゆる課外活動を含めて、そういうことはなかったでしょうか。行われているのではないかと私は信じているのですけれども。

学生に自然なかたちで親身に接する

助川　OB二人ということですので、これは答えざるを得ないかなと思っていますが。ちょっと私自身の話をしますと、私は中学高校と仏教系の、臨済宗系統の学校を出まして、大学、大学院とこの立教で過ごさせていただいて、勤めたのが浄土宗の学校です。ずっと宗教系と言えば宗教系ですよね。仏教とキリスト教ではえらい違いではないかと思うけれども、キリスト教と仏教の違いはあっても、私は宗教の基盤はだいたい同じだろうと思うのです。倫理や愛という言葉が出ました。言葉は変わっても、それに該当するものはやはり仏教にもあると思っています。

宗教的な学校で育ち、現在も所属している、という経験からいうと、学校の方針、カリキュラムを通して宗教倫理を教え込むのは難しい。立教の場合でいえば、キリスト教の行事に一般の学生が日常的に参加できる形で、自然に身につくことが、個人的意見としては望ましい、と思っています。私自身は、立教での学生生活で多くの先生方にお世話になり、そのことが今の私自身、私の教育観に結びついている、と思っています。

私的な面でもお世話になった。そういうことが、実は私は「愛」とかそういうところに結びついているのだろうと思います。首都圏大学と言ったのは、べつに広がらなくてもいいというわけではなくて、立教大学というのはやはりこぢんまりしているのです。そのこぢんまりしているところの良さを活かしてもらいたい。それだけ手をかければ、学生は絶対に伸びるわけです。

学校で今必要なのは、リピーターなのです。中学高校の卒業生が、まわりの者に、「あの学校は良かったから絶対に受けろ」と言ってくれる。それだけでもってしまうわけです。私は大学だって同じだと思います。そういった

先生たちの面倒見の良さが教育力になるし、同時に私は、そういう先生方を見ていれば、倫理や愛に結びついてくると思うのです。私は、個人的に言えば、そのことを学校の方針として徹底させるというのはあまり好きではない。もちろんそれぞれ意見が違うから、小林さんと私の意見が違うのは当然なので、それはそれでいいのだけれども、できればそれが自然に心に染みわたるようになれば、余計に宗教的なのだと考えています。私のいる学校なども生徒に押しつけは一切しません。その代わり、チャイムはどこもが使っているようなチャイムではないのです。うちは浄土宗の宗歌をそのまま時間ごとのチャイムで流しています。もちろん宗歌は行事があるときにも流しますよ。だから、そういう何げないところで自分という人間は大きな、たとえばキリスト教で言えば神ですよ。仏教で言うならば因縁。そういうものによって動かされているというときに、人間は謙虚になる。その謙虚になるというのが、そのまま宗教的倫理に結びつく、と私は思うから、自然なかたちで先生方が学生に親身になって接するということ自体が、私はキリスト教の精神にふさわしいのではないかと思います。あくまでも個人的な意見です。

立教の良さを分析して伝える努力を

山口　ありがとうございました。冨塚さんも、よろしければひと言。

冨塚　僕は中学からなのですが、入った最初の日に廊下で飛び込んできた文字がありました。「光の子らしく歩きなさい」という文字が飛び込んできまして、うわ、すごい中学校に入ってしまったなというのが最初の感想です。それから、期間によって言葉がどんどん変わっていくわけですね。最初は何のことだかよくわからなかったのですけれども、中学校３年間、それから高校は寮に入っていましたので、毎朝チャペルに礼拝しに行くという生活をして、それが何に結びついているのだろうかというと、在学中にはあまり感じなかったことですけれども、社会に出てみて、ほかの学校に行っていた人と話をしたときに初めて、自分が極めてすばらしい環境というか、そういう場で育ってきたのだなというのがわかったという感じです。大学からの友達もたくさんできましたけれども、なぜ立教を受けたのかとか、卒業したあとに、やはり立教っていいよねとなったときに、やはりその場の空気であったり、雰囲気というところを言うわけですよ。

実は企業の人事の人に立教のOBって意外に多いなというのは、仕事をしていて気がついたのですけれども、立教の卒業生ってそんなに多くないのに、人事をやっている人は、なぜ早稲田や慶應より立教の比率がこんなに高いのかというのは、僕は非常に不思議でした。外からの立教生に対しての評価というのは、やはり中の上で、比較的いい奴が多いよねという。ただ、慶應ほどお坊っちゃんではないのだけれどもと。逆に言うと、無色透明に近いようなことをよく言われるわけですけれども、そういう部分は、やはりその場の空気のなかで醸成されていくものではないかなとすごく思います。

在学時代に何が印象に残っていたかというのを友達と話をしても、たとえばこれからクリスマスの季節が来るわけですけれども、クリスマスの時期の大学のあの雰囲気だったり、そこで生活をした自分と友達や教授とのかかわりみたいなところが、いるときにはわからないけれども、外に出るとよくわかるみたいなところがやはりあると思っています。

僕は先ほどイメージが大切だという話をしました。確かにソニーさんが革新的なイメージということでやってこられたかというと、その当時はできたけれども、今はできないよねというのは、確かにそのとおりだと思います。では、今のライブドアや楽天がどんな戦略をとっているのかというと、逆に言うとイメージだけで実体がないのではないかとも言われているわけなのですね。ですから、それは何が正しいか、正しくないかという話ではなくて、やり方しだいかなと思っています。なので、事実、ファクトがないとものは言ってはいけないと思いますけれども、立教の良さというのを、在校生のOB、OGが何をどう感じているのかというところをもっと分析した上で、そこの強みは強みとして、胸を張ってもっともっと言えばいいではないかと、僕はすごく思ってしまうのです。そこの空間で過ごした人にしかわからないことというのがあると思うのですね。ただ、そこにいる人はそういうことだけ言って、いや、立教には立教の良さがあるんだよ、なぁなぁなぁというのが、やはり打ち壊せないのかなと思っていまして、それをどうすれば理解してもらえるのかというのが、たとえば僕らの仕事でやっているのが、体感させるということやシミュレーションさせるということをいろいろやったり、手法論はいくらでもあると思っています。もっと重要なのが、さっき言ったような、どうありたいのか。ビジョンからくるありたい姿みたいなところに

どう共鳴してもらうのかをどう伝えるのかだと思っています。

山口　ありがとうございました。檜枝先生、もし今のことにコメントがあれば。

檜枝　私も冨塚さんと同じで中学から立教で、実は驚くなかれ、私は立教中学に入学してからにかかわって50年たってしまったのですね。半世紀ですよ。本当に冨塚さんが言ったのと同じ感じですね。私も宗教ってどうしても信じられなかったのですけれども、やはり何らかの影響があって、とても良質なものを自然に身につけてもらえたなと思っています。ですから、そのことを、きちんと言語化して全学でそれを共有して、外に対して組織的にアピールしていくという努力が今まで以上に必要だなと思っています。

山口　ありがとうございました。それではまたフロアのほうから、ご意見をお願いします。

インターンシップへの期待

会場3　大学教育開発・支援センターの委員で、法学部教授の小川と申します。先ほど檜枝センター長より校歌のご紹介がありましたけれども、私は非常に不思議に思うのは、校歌を覚えろというプレッシャーがないのですね。それぐらい自由だと思っています。立教大学は角を矯めて牛を殺してはいけないという感覚をずっと共有してきたと思っています。その上で、たとえば現在インターンシップ教育というものに非常に力を入れていますが、先ほどの冨塚さんのデータですと、たとえば社会がインターンシップ教育に対して期待をしている度合いが非常に低い数値を拝見したように思います。檜枝センター長のご紹介された社会との連携というのは、狭い意味でのインターンシップ教育に限られるものではないと思うのですけれども、このへんはたとえば、技術系の産学協同といったこととは違う意味で、立教のような大学でどう考えればいいのかということをおうかがいしたいのです。

それと関連して、意思決定のしくみというのでしょうか。個々の教員の教え方というものではたぶん対応できない部分について、しかしあまり集権的というか、権益的な発想で大学を動かすということは、たぶん立教大学は向いていないのではないかということがあって、そのへんは多くの大学をご覧になった見地から何か参考になるご意見はありますでしょうか。

冨塚　一つ目のインターンシップの件ですが、ここのデータで出ているのは、採用基準で重視する項目ということなので、インターンシップの経験がある人は買いだ、非常に買うということとしては見ていませんというだけのデータです。

逆に言いますと、私どもの会社もそうですし、最近多くの会社がインターンシップに力を入れているというのも事実でして、やはりインターンシップで、中で見てもらう。見てもらって何を感じてもらうのかという部分もありますし、逆に一緒にやっているとよく見えてくる、採用選考だけのたった30分や1時間という時間だけではなくて、よく見えてくるところもあるよねというところもある、両方あると思います。

ですから、インターンシップという制度に対しての期待は、やはりものすごく上がってきていますし、参加してくれたなかから入社に結びつく率も現実的に高い会社が非常に多くなっているということも事実としてあります。

すごく汚い言い方をしますと、企業側にとって採用上の手法として、インターンシップというのはすごく有効的だという見方を2つの側面でしています。一つは、実が取れるという意味ですね。採用に結びつくという意味。二つ目は、先ほどのPRではないですけれども、参加してもらった学生がよければ、あそこはいいという口コミ効果みたいなところは、企業側としては正直意識をしているところだろうなと思っています。

すみません、二つ目のお話は他の方にお願いしたいと思います。

山口　どなたでもよろしいですよね。いかがでしょうか。これはまず、檜枝先生にお願いします。

一体感を持った意志決定が必要

檜枝　では、講師の方に答えやすくなってもらうために、もう少し私なりの解説を加えます。たぶんトップダウンか、ボトムアップか、あるいはそれのバランスをいかにうまくとるかという質問だと思うのですけれども、教員集団というのは本当に身勝手で、命令したからといって動くものではない。そういう集団を相手に、一つのベクトルにそろえて教育力をつけて成果を出していくためには、やはりトップダウンとボトムアップの両方が必須だと思います。つまり、お互いに相談し合って、一体感を持った意思決定が必要で

す。そういうことが非常にうまくいっているような他大学の事例があったら教えていただければという質問と思います。そういう意味でよろしいですか。ちょっとずれているかもしれませんけれども。本日の講演の先生方は皆さん、多くの大学のことをよくご覧になっていると思いますので、よろしくお願いいたします。

教育力には組織力が大事

滝　やはり教育力というのは、個々の大学の先生の力だと思います。しかし一方で、個々人の力だけに頼っているというのは、かなり厳しくなってきているのかなという気がします。

現状では、組織的にうまくやられている大学はまだ本当に少ないので、私も事例はあまり知りません。先ほどの金沢工業大学では、教養教育を担当している先生たちの個人研究室が廃止され、このホールよりも少し狭いですが、ひとつ場所に全員集められました「工学基礎教育センター」というのですが、数学、物理、化学といった基礎科目の学びを、学生個々のレベルに合わせてマンツーマンでサポートしています。中学校、高校レベルの内容はもちろんのこと、授業でわからなかったこともそこに常駐している先生に質問できます。最近、オフィスアワーといった制度をどこの大学も取り入れていますが、なかなか学生に活用されていないのが現状です。しかし金沢工業大の場合は、先生たちが授業以外は原則としてそのセンターに常駐しているわけですから、学生たちはいつでも誰にでも聞きに行けるわけです。そのため、一年生の約８割が利用しています。

もちろん、先生たちも最初は個人研究室がなくなるということでかなり反発があったようです。しかし、実際機能し始めると、先生たちの間でこれまでしなかった情報交換ができるようになり、学生の現状をよく把握できるようになったようです。そのため、たとえば今年の学生はこういうところが弱いからということで、先生たち自ら率先して教材を開発するなど、大変良い効果が現れているようです。そういった意味では、教育力という観点からみても、やはり組織力は大事だと思います。

小林　教育力ということがテーマになっていまして、私も本当にそう思います。ただ、私は甚だ自信がないのは、教育力がどうやって測れて、どうい

う結果から教育力を見たらいいのかということが、正直言って私のなかではよくまとまらないということがあります。

ちょっと個別の大学の名前というと差し障りがあるのですけれども、あえて言ってしまいます。たとえば早稲田大学さんですと、20年前ぐらいに比べればかなり変わりました。教育力をもうちょっと分解すると、たとえば厳しさ、厳しい成績評価で、もちろん休講は絶対にしないなど、そういう本当に基本的なところから徐々に変えていくというところ。授業が厳しくなった、出欠が厳しくなったというのは本当に方法論的なところなのですけれども、そういうところから変わってきた。

もう一つ、これは早稲田の例ではないのですが、先生がすごくいやがったのは、教員同士の相互評価、授業参観的なことも大学で取り入れるようになった。なぜここの授業はこんなに学生が来て盛り上がるのだろうかという、ある授業があったときに、見学してみよう、それで学び取ろうと。同僚の先生で非常に学生の付加価値がついたとか、授業が非常に盛り上がって、ディスカッションを激しくやっていると。どうしてそういう授業が行われているのかということを知るために、教員による授業参観を行われているところがあります。

もう一つ、これは本当に方法論なのですけれども、90分の授業のなかで、45分というか、半分以上はしゃべらないと。学生にどれだけ話させるか、その方法をどうしたらいいのか。たとえばプリント配って何かを書かせたり、しゃべらせたりするというようなことをやっている。あえて90分のなかで60分以上しゃべったらよくないのではないかとか、そういう授業配分を考えて、一方通行にならないようなことで学生参加型、先ほど学生が主役という言葉が出たのですけれども、いかに一緒にやっていくのかというような試みもあります。

逆にどうかなと思うのは、わりと今でも流行っているのは、経営学部系で、NHKの『プロジェクトX』をビデオで全部見せて、それで感想を言い合ってディスカッションさせる。確かに最初はそれでよかったのかもしれないのですけれども、ではそれでどうなるのというところと、それが授業としてどうなのかというような意見もあります。

教授側のなかでお互いの授業内容についての点検をするのはけっこう難し

いのですけれども、ただ、先生はどんな授業をやっていますかというようなことを、教員同士で相談するような雰囲気になっているのは確かだと思います。

構想力を育てるコーチング教育

冨塚　小川先生の質問へのぴったりの答えになるかわからないですけれども、宮城大学に事業構想学部というのがあったかと思うのですが、僕は最初は非常によかったなと思っていまして、講演でいろいろな大学に行って話したときの学生の食いつきが、ここだけ異次空間でした。何かというと、そもそも普段の授業から、先生に教わるということではなくて、先生に手助けをしてもらって、コーチングされているという感じなのですね。主体者は自分で、自分の考えをぶつけていって、それに対してもうちょっと視野を広げてもらうような教育を各先生がそれぞれやられているという話を聞いて、だから全然違うのかとすごく思ったことがあるのです。

これをほかの人事の人と話していても、まったく同じ話を各人事の部長さんがされていて、最近の社会人に欠けている部分、構想力というものが日本人は非常に落ちてきているという力を、あそこの生徒はやはり持っているよねというのが、当初１、２年は言われていました。ただ、学内の問題でいろいろあったようでして、それが変わってしまったというのは非常に残念なのですけれども、そこで肝心だったのはやはりティーチングではなくコーチングなのかなと思っています。

これは我々の世界でもまったく同じでして、教わらないとできないという社会人はもういらないわけです。優秀なマネージャーというのはコーチング力に優れているので、僕らはマネージャーの能力開発で、どうコーチングできるようなスキルをつけさせるのかというところを人事の教育開発のポイントに置いているというのも、そういうところと通じるところが非常にあるのではないかなと思います。

あと各論で言うと、○○大学の○○先生のゼミの生徒というのは、非常に考える力に長けているよねと。先ほどの構想力と近い話なのですけれども。たとえば一橋大学の一条ゼミの学生というのは、やはりほかのゼミの子たちとちょっと違うところがあるよね、みたいなところですね。

先ほどの宮城大学の先生の話との共通点は何かなというと、社会、実業と非常に近い、もしくは実業出身者の方が教授をやられていることだと、僕はすごく感じてしまうことがあって、最初から先生だという方もいらっしゃいますけれども、やはり社会や企業との接点をものすごく持たれていて、そこの部分の背景みたいなところを持ちながら、学生にコーチングをされていくところがあるので、学生と会話をしていてもすごくリアリティがあるなという感じがしました。

山口　ありがとうございました。寺﨑先生、お手を挙げたと思いますので。時間があまりないので、最後の質問にさせていただきたいと思いますが、よろしくお願いいたします。

「いい隠れたカリキュラム」で新しい学力

寺﨑　立教学院の調査役で、大学教育開発・支援センターの顧問をしております寺﨑です。私が今日、残念でしかたがないのは、せっかくこんないいお話が出たのに、おいでになった方が少ないことです。それも立教大学のポイントかなと。こういうテーマは皆さんあまりお好きではないのかなという印象すらあって、残念です。逆に言うと、そういうギトギトしたところがないというのが立教の特徴なのかなと思ったり、今、心中葛藤しています。

先ほどのお話に関連して、質問ではなくて２つ申し上げたいと思います。一つは、教育改革の世界には、隠れたカリキュラムと顕在的カリキュラムというタームがあります。もともとは批判的に出てきた言葉で、顕在的な制度化されたカリキュラムがいかによくても、隠れたカリキュラムのところで社会的な価値観がなだれ込んできて目ざすものが失われるという、批判的なタームなのですが、今は便宜的に、「いい隠れたカリキュラム」という言葉を使うと、おそらく檜枝先生がおっしゃっているのは、立教大学が持っている「いい隠れたカリキュラムというのは何か」、「それを言語化してスローガンにするにはどうしたらいいか」というご提言だと思うのですね。私は、それは非常に重要なことだと思います。

ただ、難しいのは、それをやるにはすごくたくさんの変数があるわけで、一方では歴史と伝統をベースに踏んでいなければいけないし、また、ミッションリーであるかどうかということとも関係がある。それから今後の経営上

プラスにならなくてはいけないという状況もある。３つか４つぐらいの変数をカウントに入れなくてはならないから大変だと思うのですが、ぜひ現役の先生方に頑張っていただいて、何か編み出していただきたいと思います。

この先のほうに出てくると思う問題ですが、立教大学だけではなくて、今すべての大学・学校がぶち当たっているのは、ポスト・インダストリアル・ソサエティに必要な学力とは何かということだと思います。我々は工業化社会、あるいは産業化社会に適応するための教育システムというのを、明治以来130年間つくり上げてきた。これだけの義務教育制度を持っている国は、実は世界にないのですね。その中で画一化された均一的な学力が大事だと思ってやってきたけれども、それでいいのか。これが冨塚さんがたびたびおっしゃった、必要だと思われている学力と、今後つくられなければならない学力との差だと思います。

立教大学がいい意味での隠れたカリキュラムだと思っているのは、未来社会にとって必要な新しい学力ではないか。そのへんを発見していく作業ではないかという印象を強く持っています。

もう一つは、修身教育、道徳教育のことです。私は助川先生のおっしゃることに非常に賛成です。大学は規範を教えられるかという問いがあると思います。我々は規範を教えるために学問あるいは科学を教えているのか。そんなことはないと思います。それをやり始めたら、訓育、やはり修身の教育に移行していく。あるいは昔の修身の教科書のように、誠実さや正直や忍耐、さらには別のもっと大きなまがまがしいスローガンにつながっていくと思います。そうではなくて、我々が教えているのは、何を規範と考えるか、その基礎の部分なのだと思います。ですから、環境というものをめぐってカリキュラムが組まれているとしたら、例えば何を環境と考えるか、それはどういう問題を抱えているか。あるいは、人間の生活にいかに関わっているか？人間のできることは何かといった基礎的な知見をきちんと教えていくのが大学の義務ではないかと思います。

その点では、大学における教養教育は、あるがままのダイレクトなかたちでは何かが足りない。むしろ先ほどの隠れたカリキュラムというもののなかでつくられていくものであろうと思います。しかし、それを方向づける経営的センスがやはり必要だろうと理解しているものですから、今日は実に刺激

を受けました。どうもありがとうございました。

山口　どうもありがとうございました。今、寺﨑先生のほうでまとめられたことで、ある意味、今日のシンポジウムのかいがあったのではないかと思います。司会の不手際で、すでに終了予定時間の８時半を回ってしまいましたので、このへんで今日のシンポジウムは終わりにしたいと思います。

最後に、このシンポジウムのためにお忙しいなかわざわざお越しいただきました４人のシンポジストの方々に拍手をもって感謝をして、終わりにしたいと思います。今日は本当にどうもありがとうございました。これにて終了したいと思います。

（終了）

資料１

「大学ランキング」から見た日本の大学

朝日新聞社「大学ランキング」編集部
小林哲夫

＜１＞日本の大学の現状

（１）大学の役割を、①教育、②研究、③社会貢献と定義。それぞれについて、大学は機能を果たしているか。
①教育＝ＦＤが学生に伝わっているか。教員個人の教育能力、教育システムの完備
②研究＝社会との関連性。発信能力。世界との競争
③社会貢献＝地域住民とのかかわり。市民への啓蒙（メディアからの発信）

（２）大学の機能
①世界的な研究・教育拠点＝４
②高度職業人の養成＝１
③幅広い職業人の養成＝３
④総合的教養教育＝５
⑤芸術など特定分野の教育・研究＝７
⑥地域の生涯学習の拠点＝６
⑦地域や産官学連携など社会貢献＝２

（３）文部科学省、経済産業省の高等教育政策
①ＧＰ、ＣＯＥをどうとらえたらいいか
②産学協同の位置づけ
③設置申請時における戦略（新学部、学部名称）

（４）大学の経営戦略、情報公開
①学生募集
②広報
③企業とのつながり

（５）大学の多様化
①学力未到達への対応
②就職支援の充実
③教養教育の見直し

＜２＞立教大学への評価

（１）難易度と併願状況
①経年変化
②学生からの人気
③新学部はどこと併願されるか
④学生の出身地

（２）ブランドイメージ
①ミッション系
②池袋という地域性
③卒業生の活躍

（３）教育、研究
①全カリの効果
②語学教育の成果
③研究者の活躍
④教員の自校出身（経済、理↑。法、文↓）
⑤教員の博士号取得（法、文↑。経済↓）

（４）進路
①就職先の特徴（公務員よりも民間企業）
②業種の特徴（生損保、銀行系）

＜３＞大学ランキング誌の概要

◆編集部と大学の微妙な関係＜刊行 121 年目の変遷＞
①編集部から大学へ（情報提供依頼）／大学から編集部へ（他大学に関する質問）
＊94～97 年＝ランキングに対する不信感、批判。
＊98～00 年＝急激な変化へのとまどい。
＊01 年～＝経営戦略的な読まれ方（法人化、私大経営問題）
②国立大学⇒情報公開が急速に進む。対応が良好。私立大学⇒情報の公開内容を調整（入学者、合格者、AO など）
③ランキングの読まれ方＝大学のポジションを知りたい。国立大学は再編統合のシミュレーションづくりの資料に（教員数、論文引用度、研究費、学位など）

◆ランキングの有効活用方法
①設置認可申請（大学院設置における論文数、研究費）
②企業、財団などから外部資金獲得（研究費、論文数、産学連携度、注目研究内容）
③学内予算獲得（ランキング上位、下位からの活用法）

＜４＞大学に求められている情報公開

（１）新しい情報を積極的に公開する
①教育、研究内容
＊新設学部、学科の詳細
＊制度。インターンシップ、留学制度、単位互換性、奨学金制度
＊カリキュラムと教育内容。補習、語学、コンピューターなど
＊産学連携事業、特許、TLO
＊就職状況＝就職指導方法、内定率、確定率

②教員の業績、活動
＊権威ある賞の受賞
＊国際的なジャーナル（「ネイチャー」「サイエンス」など）への論文掲載
＊国際会議への参加、政府や自治体の審議会・委員会参加による政策提言
＊メディアへの登場。新聞、雑誌、単行本執筆、テレビ出演
＊社会への啓蒙活動。公開講座や会見を通じて火山噴火予知、災害への対応、年金や税金の解説。地域ボランティア、市民運動への参加

③学生の活動
＊スポーツ、弁論大会、コンテスト、懸賞論文などの成績
＊地域でのボランティア活動。
＊個人でのユニークな活動。自転車で世界一周、起業

④大学の動き
＊企業との提携、海外への進出、高校との連携

（２）メディアとうまくつきあう方法
①記者会見
＊新情報の紹介、不祥事への対応は速やかに行う
＊学長、学部長、理事クラスの最高責任者が対応
＊資料はきめ細かなものが必要。そのまま新聞記事になるような具体的、簡潔な内容
＊文科省記者会幹事社へセッティングを依頼。

②大学広報資料の送付
＊送付先＝新聞、雑誌およびテレビの社会部教育担当記者へ
＊ビジュアル（写真やチャート）を用意
＊大学広報、学生新聞の定期的な送付
＊メディアで取り上げられた資料をまとめて送付

③最新情報についての対応の仕方
＊最新情報を電話で聞かれた場合、「責任者と相談します」「会議で結論を出します」では遅すぎる。その場で対応しないと、とくに、新聞、雑誌記者は他大学へアクセスすることになり、取材を受ける機会＝宣伝できるチャンスを失う。とくに入試や就職実績、財政状況などはだれでも対応できるようにする。
＊受験情報誌、学問紹介誌へ協力と売り込みを恒常的に行う

＊入試広報部門を強化。広報担当者は５年は在職してほしい。プロフェッショナル化のために、学外のマスコミや広告代理店からのスカウトも。
＊各種アンケートによる情報協力。事前に入試情報や大学基礎データ（学生数や教員数）などを準備。回答が早く、内容が充実しているほど取材を受けやすい
＊非公表は避ける。受験者、合格者、入学者、退学者など
＊メディアからの電話による問い合わせは迅速に教員や学生の活躍を資料にまとめて送付
週刊誌、受験雑誌からのアンケート、取材協力に回答する

④スターを作り、売り出す
＊教員＝研究業績、メディアへの積極的な登場
＊職員＝就職担当、入試担当
＊学生＝さまざまな分野での成績優秀者、スポーツや芸能分野の著名人

（３）大学の不祥事への対応
①説明責任と謝罪の必要性
＊入試の不正、ミス
＊経理関係の不透明
＊教員、職員のセクハラ
＊学生（留学生）の受け入れの水増し
＊学生の刑事事件
＊教員の刑事事件

②謝罪の方向性（相手）
＊社会に迷惑をかけた
＊相手を傷つけて迷惑をかけた

③謝罪する責任者
＊学長、学部長、当事者

（４）高校へのアピール
①進路指導
＊就職実績、就職指導
＊教員の個性、厳しい教育内容、保護者会
＊学習未到達へのフォロー

②高大連携の推進
＊高校から信頼されるために。出張授業、大学体験

＜５＞――大学情報の読み方――
（高校向け）進路指導での留意点

（１）はじめに

大学に対する満足度は学生１人ひとりの価値を高める教育が行われているかどうかが大きな鍵になる。1990 年代、多くの大学で英語とコンピューターの教育に力を入れるカリキュラムが作られた。しかし、その成果はどうだったのだろうか。英語を自由に話せ、コンピューターを自在に扱える人材を育成することができたか。残念ながら、成果がなかなか見えてこない。大学教育に問われるのは目標よりも、その成果である。たとえば、TOEFL で目標に掲げたスコアーを何割の学生がクリアできたか。しっかり明示できる大学は信頼に足るといえよう。

いまは、資格取得、就職支援、教養教育、補習授業などが大学改革のキーワードになっている。これらをカリキュラムに採り入れるところが増えているが、その成果をきちんと出している大学を見きわめることから、受験生に適切な進路指導をおこなうことができるだろう。そのためには、大学に教育成果についての情報公開を求めることが大切だ。

（２）ミスマッチを防ぐ

大学に入ったけれど、自分が描いていたイメージと大きな隔たりがある。毎年、そんな後悔する学生は少なからずいる。満足感を得られなかった彼らは自分に合った大学へ再チャレンジの道を選ぶ。もったいない話である。経済的な損失は大きい。いったい、どこに問題があるのだろうか。大学選ぶとき、しっかり情報収集しなかったこともあろうが、大学の情報（データや中身）を見誤ったことも大きな要因といえる。

（３）大学情報を読む

①キャンパス

東京という名前が冠してあっても、メインキャンパスが都内でない。１、２年次は自宅から通えないような遠隔地にキャンパスがある――などのケースには注意したい。キャンパスの所在地はパンフレットに明記されているので、受験前段階で確認してほしい。

②立地条件

駅から離れたキャンパスでは、シャトルバスを運行しているかどうか。頻繁にダイヤが組まれているのであれば問題はないが、１時間に１～２本程度で、毎日、すし詰め状態というのはつらい。通学意欲がわかず、キャンパスから足が遠のいてしまう。

③AO 入学者数

多ければ、さまざまな個性をもった学生を受け入れたのでキャンパスは才能がぶつかって合い群雄割拠の様相を呈すといえなくもない。しかし、定員割れを防ぐために青田買いした大学もある。AO 入学者が個性を伸ばしているかが重要なポイントだ。

④学生数と教員数

ある程度の教育環境がわかる。文科系でいえば、教養科目はどの教室も学生で満杯という状況は環境が良いとはいえない。教員１人あたり学生数を同じ学部系、同じような学部定員、同レベルの偏差値で比較してみよう。学生数が少ないところはマン・トゥー・マンに近く質が高い教育をおこなっているといえるが、それでも限度はある。定員のうち７割の充足率がせいぜい。定員割れの数値は半分以下では大学の存続にかかわってくる。

⑥海外からの留学生数

AO 入学者と同様のことがいえる。比率が高い大学は国際色豊かといえるが、その一方で、青田買いで能力や質に問題がある外国人を受け入れて不法滞在者をたくさん出している大学がある。

⑦海外への留学生派遣

学生が大学の制度を利用して留学するケースについて、半年以上の期間であれば、単位が振りかえられ４年で卒業できるかを確認したい。また、海外の滞在先には日本人が多数かたまっているというケースも見られ、ホームステイ先などでのトラブルも起こっている。

⑧教育内容

語学教育は目標とその到達度をみるとわかりやすい。英検のレベル、TOEIC や TOEFL のスコアーではどこに目標をおいて、何％の学生が到達したかを知りたい。「TOEIC や TOEFL の対策に力を入れており、毎年〜〜人受験する」という宣伝には説得力はない。

⑨図書館

蔵書冊数、貸出冊数で評価されるが、開館時間に注目したい。交通アクセスの良い大学では午後 11 時すぎまであいているも。IT 環境はパソコン台数やネット接続数も重要だが、教室、談話室などに光ファイバーケーブルの差し込み口がどれだけ多くあるかをチェック。

⑩研究レベル

研究の充実ぶりをはかるには、論文数、論文引用度、研究費が尺度になる。どの分野が強いかを知る。大学全体で論文数が多いのは、たとえば、理論物理でノーベル賞クラスの研究者が１人でポイントを稼いでおり、化学系はまったく弱いという大学もある。

⑪就職状況

パンフレットで就職率 99％以上、100％をうたっているところがある。これはウソと考えていい。卒業生に占める割合を考えるとあり得ない話だ。就職希望者を分母におくといくらでも高い数値になる。卒業生－進学者（大学院、他大学など）を分母においたデータをみるべきだ。また、正社員ではなく、派遣業務への登録が含まれるケースもある。

⑫奨学金制度

最近、入試成績で奨学金を出すところが増えた。また、奨学金の審査が「成績優秀」という尺度ではなく、「研究したいテーマ」を募っているところもでてきた。

⑬補習授業

大学に学習支援センター、基礎教育センターなどが設置されているか。高校卒業までの「学習履歴」を把握してくれるかどうか。補習の担当教員が元高校教諭、予備校講師などプロフェッショナルかどうか。大学の授業の補習が充実しているかを確認したい。

⑭資格試験

合格の可能性が高い学生しか受けさせないところがある。その学年の学生数と試験受験者数に大きな開きがある場合、要注意だ。社会福祉士、理学療法士、管理栄養士、薬剤師などはカリキュラムで対策が講じられる。

（４）大学情報の種類

①パンフレット、Web サイト

大学の概要、学部の紹介、入試情報など基本的な情報を確認できる。ただし、良いことしか記されていないので、その大学のすべてを知ることはできない。夏ごろに最新パンフレットができるが、次年度の新設情報に乏しい。受験前の入試要項で確認のこと。新しい学費もこのとき初めて知ることができる。

ひとつ注意してほしいのは、パンフレットにある「唯一の」「日本（世界）で初めて」「もっとも充実している」という文言だ。日本に 700 以上の大学、1800 以上の学部がある。ここの大学にしかないモノ、というのはきわめて少ないと考えていいだろう。

②『大学ランキング』（朝日新聞社）

各種ランキング、データから大学の強みや得意分野を知ることができる。しかし、数値を額面どおり受け取るだけでは、本質がつかめないことがある。データ分析には慎重に。

③経済誌のランキング

「出世」「役に立つ」などをキーワードにした評価。上位大学は歴史と伝統があるところに集中する。大学教育との因果関係は見いだせない。読み物としておもしろい。

④大学広報誌（大学広報室発行）

学生、保護者向けで最新情報に触れられる。また、マスコミで旬な教員の研究内容、部活やサークルで活躍する学生の横顔、功成り名を遂げた有名人 OB の自慢話に触れられる。

⑤大学新聞、ミニコミ、Web サイト（学生が発行）

大学がかかえている問題点が語られており、学生の考えをうかがい知れる。たとえば、女子トイレを増やせ。厳しい授業評価をおこなうところもある。ゼミやサークル紹介も。

⑥就職の手引き（就職課製作）

受験生が読むには早すぎるというものではない。この大学を卒業してどんな仕事に就けるのかを想像できる。また、就職体験記から学生時代に何をすべきかを知ることができる。大学オリジナルの手引きがベスト。外部業者がつくったものは、あまりにもマニュアル化しすぎて役立たない。それは奥付の制作者で確認できる

⑦自己評価報告書

大学の知られざる部分を見ることがきるウラ技である大学がいま、どんなことを反省しているかを知ることができる。もっと、就職率を高めるべき、研究費を増やそう、論文を生産しなくてはダメなど、なかには「こんな教育では不十分」と自虐的な記述もある。

⑧教員、職員

キャンパスツアー参加、広報課訪問で教職員の姿勢をみる。元気がないところ、愛想がなくサービスが悪いところは要注意。教員の場合、ホームページを持っているので、アクセスしてみるといい。ゼミの学生紹介や授業の中身を知ることができる。高校生からの質問に応じてくれる場合がある

資料２

立教大学シンポジュウム

Ⅰ．中学・高校生は大学をどのように選ぶのか。

① 一般的な進学指導

進学指導係による説明会、卒業生による大学説明会、各大学広報部による説明会（芝の場合―― 慶応・立教・中央・明治・東京理科大・北里大学[医]）を経て、予備校の偏差値表により実力に合わせた大学・学部を選ぶ。

② 「自分探し」としての進路指導

例１．（福岡県立城南高等学校―― 「ドリカムプラン」）

目的（生徒自身の主体的な進路学習）

高校１年―― イ．ドリカムガイダンス（人は如何にあるべきか？―年５・６回）

調査の年 ロ．10年後の私 20年後の私(作文)。

ハ．職業ガイダンスセミナー（卒業生を講師にして）

ニ．シラバスレポート（大学のシラバス調査）

ホ．ディベート大会（会社に関係する内容）

ヘ．ドリカムグループ９系統選択

（理学・工学・医療保健・生物農学・人文科学・社会科学・芸術・教育・生活科学）

高校２年―― イ．シラバス研究 ロ．オープンキャンパス参加 ハ．ジョイン

自己啓発の年 トセミナー（大学の先生による出張講義）ニ．小論文コンクール

高校３年―― 学力の育成

自己表現・実現の年

例２．（私立海城中学―― 中学卒業論文〔社会ⅠⅡⅢ〕）

目的（社会的視野を大きく広げ、論理的思考力や自分で問題を立て、自分で調べ、研究できる力の養成を図る。）

中学１年―― 生徒に社会的関心を喚起することに主眼が置かれる

中学２年―― 問題を一般化し、政治・経済や世界との関係まで見すえる。

中学３年―― 原稿用紙 30～50 枚の卒業論文を仕上げる。（卒論の内容― 民族問題、過労死、原発、高齢化社会、夫婦別姓、Ｊリーグ等）

結果―― テーマと将来の方針を持つ生徒が増えた。

例３（私立鴎友学園中学・高等学校―― 進路指導）

中学１年―― 「自分レポート」（幼少時から現在に至るまでの「周囲から作られた自分」を再確認し、その生き方を受け入れた上で、今後の人生を「自ら展望」させる。）

中学 1～2 年―― 環境問題や福祉問題を扱う（社会的な大きな枠組みの中で生きている自分の自覚。）

中学３年―― 実社会とのつながりの自覚（卒業生による進路説明会、職業につい

て家族との対話をとおして「夢」をレポート。

高校１年生――　進路適性検査を通し、自己将来を見据え、その実現につながる大学の学部・学科の調査。

例４（芝中学・高等学校）

① ２年前に立ち上げた進路指導委員会（構成員）

② ２年前までの進路指導（高１での進路適性検査、職場訪問・大学訪問（平沢宗一郎――青山学院仏文科）大学説明会・芝法曹会による説明会・模擬裁判）

③ ２年前の高１・２に対すら職業調べと、オープンキャンパスレポート。（将来が決まらない、或は決めたくない斉藤〔ウェスリアン大学〕の例）決まっている末次（アーカンソウ大学〔スポーツマネージメント希望〕）、中学１年、２年に対する「自分発見シート」と高校１年でのリクルート社のＲ―ＣＡＰ採用）。ポイントは相談室主導（上智の心理学教室）。

立教大学に望むこと

アイデンティティー　――　リベラルアーツの誤解　＝　一般教養

１．　高度な専門的学問研究をする大学

２．　一般教養を学ぶ大学

３．　技術を身につけるための大学

ＩＣＵ（教養学部――　人文科学科、社会科学科、理学科、語学科、教育学科、国際関係学科）

狭い専門に留まらず、大所高所から物事を判断できる柔軟かつ批判的な知的能力を備えた「社会に奉仕する人材」。

専門分野の優秀な人材を社会に送り出すとともに、
「あらゆる学問が既存の枠を超えて結びついていく時代」（立教大学パンフレット）を生き抜ける人材を育てる。

外から見た立教大学
～ミッションと社会的要請～

2005年11月24日
河合塾　教育研究部
部長　滝　紀子

①

立教大学の入試難易度推移

学部	学科	1995	2000	2005
文	日本文A	60.0	60.0	
	日本文B	57.5	60.0	
	日本文			62.5
	英米文A	62.5	62.5	
	英米文B	60.0	62.5	
	英米文			62.5
	史学A	62.5	60.0	
	史学B	60.0	57.5	
	史			62.5
	心理A	65.0	65.0	
	心理B	62.5	62.5	
	心理			62.5
	教育A	62.5	60.0	
	教育B	62.5	60.0	
	教育			62.5

②

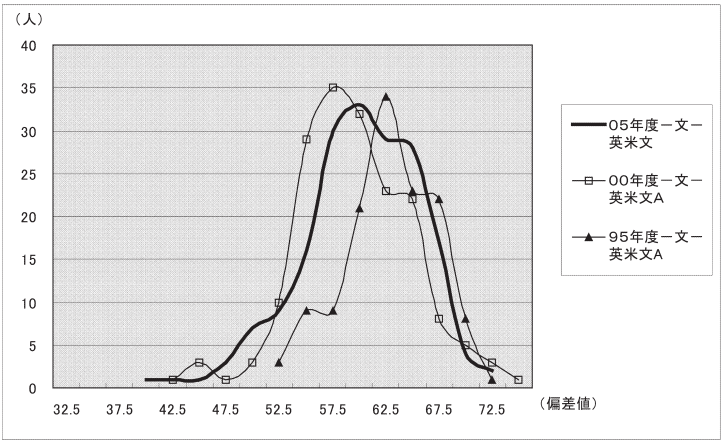
立教大学の入試難易度推移

学部	学科	1995	2000	2005
社会	社会	65.0	62.5	65.0
	産業関係	60.0	57.5	60.0
	現代文化			62.5
コミュニティ福祉	コミュニティ福祉		57.5	57.5
観光	観光	62.5	57.5	57.5
法	法	62.5	62.5	62.5
	国際・比較法	65.0	60.0	60.0
	政治		60.0	60.0
経済	経済	60.0	60.0	60.0
	経営	60.0	60.0	62.5
	会計ファイナンス			60.0
理	数学	57.5	55.0	52.5
	物理	60.0	57.5	52.5
	化学	55.0	55.0	55.0
	生命理学	55.0	57.5	57.5

③

立教大学合格者の学力分布推移

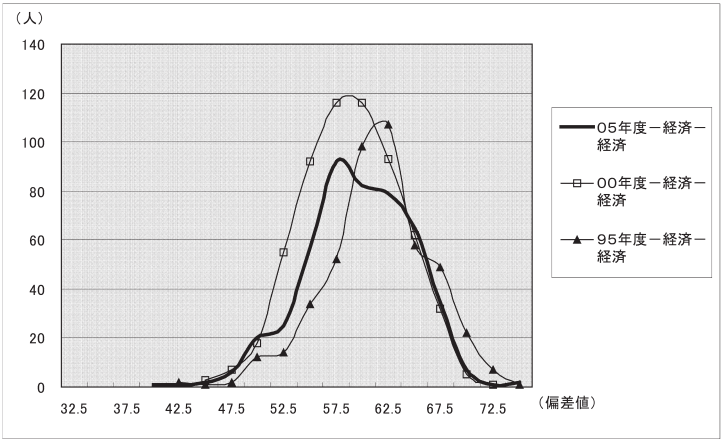
<文一英米文>



④

立教大学合格者の学力分布推移

＜経済―経済＞



⑤

河合塾チューターから見た立教大学（東京）

学部	良い点	悪い点
文	・英語がしっかり学べる。 ・立教＝英語というイメージがある。 ・英語が難しいが、それだけにカリキュラムが良いと思われる。	・学びの内容がよくわからない。 ・特色がなく他の大学の文学部と変わりがないと聞く。
社会	・看板学部ゆえ、教授陣も精鋭揃い。 ・学内でNO.1の印象。 ・教授陣が充実している。 ・マスコミに強い。	・学生自体にあまりカラーがない。 ・学びの内容がよくわからない。 ・やはり国立大には負けると思う。
コミュニティ福祉	・現場実習が多いので評判。 ・福祉と心理の両方を学ぶ事ができる。 ・基礎ゼミが充実していて、福祉体験ができる。	・福祉メインではないので中途半端。 ・本当に介護・福祉関係の企業に就職が良いのか疑問。 ・学部の方向性や内容が明確でないため、福祉関係以外の就職に不安。
観光	・立教大学オリジナルの学部ゆえ、専門的に学問に取り組める。 ・特色のある学部なので、目的意識を持った生徒には勧めやすい。	・観光業界が不安。また、観光以外の就職に不利なのではとの意見が多い。 ・興味はあるが就職先に不安を持つ生徒が多い。

⑥

河合塾チューターから見た立教大学（東京）

学部	良い点	悪い点
法	・国際関連の勉強ができる。 ・日本の法律だけではなく、米国の法律を学習できる。 ・堅そう、真面目。	・入試難易度が高い割りに、司法試験合格の実績がやや低い。 ・立教のイメージからすると影が薄い。 ・「法学部といえば」というイメージはない。
経済	・教授陣が充実しており、専門家のアドバイスが受けられること。 ・ゼミが充実していると聞いた。 ・就職が良い。	・可もなく不可もなくという感じ。 ・“立教の経済”という独特のカラーがない。
理	・大学院への進学者が多い。 ・研究室が良い。 ・少人数制。	・企業と提携している研究室がほとんどない。 ・工学部系がないため、文系大学というイメージが強い。また、理学部だけなので、カリキュラムや設備などが心配。
全体	・かっこいい。おしゃれ。立地の良さ（池袋）。就職がいい。伝統がある。 ・語学は少人数でしっかりやってくれる。	・遊んでいる学生が多いというイメージ。 ・国際的なものばかりを取り上げている。 ・キリスト教のイメージが先行してしまうので、受けにくいという生徒もいる。

⑦

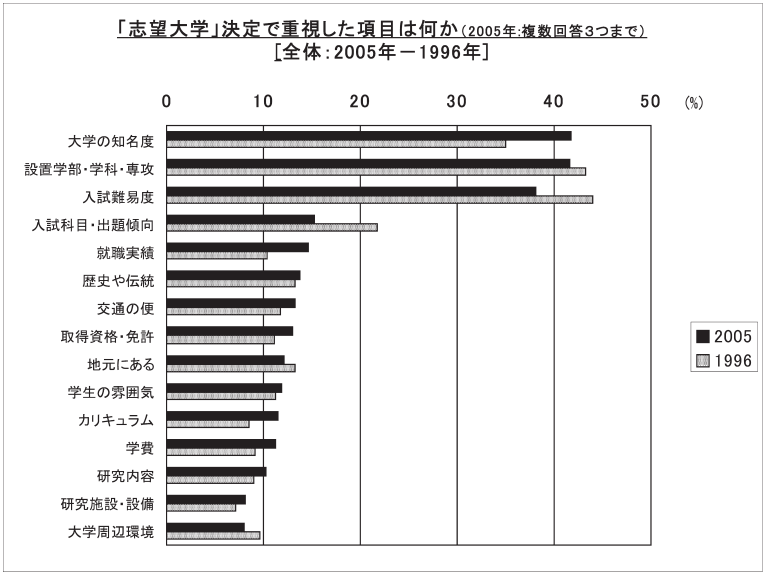
河合塾チューターから見た立教大学（名古屋、大阪）

●イメージは？
・東京のおしゃれな、どちらかというとお坊ちゃま、お嬢様学校
・就職はマスコミ関係に強い。
・観光学部や経済学部のイメージ。
・理系学部のイメージが薄い。
・入試では英語ができないと合格できない、大学では語学力がつきそうなイメージ。
・地方出身が少なそう、女子学生の割合が高そう。

●明治大、法政大、中央大と比べて？
・男子生徒は、どちらかというと明中法の方が受けやすい。
・法学部だと中央大、理系だと明治大。
・立教大の位置取りは曖昧。

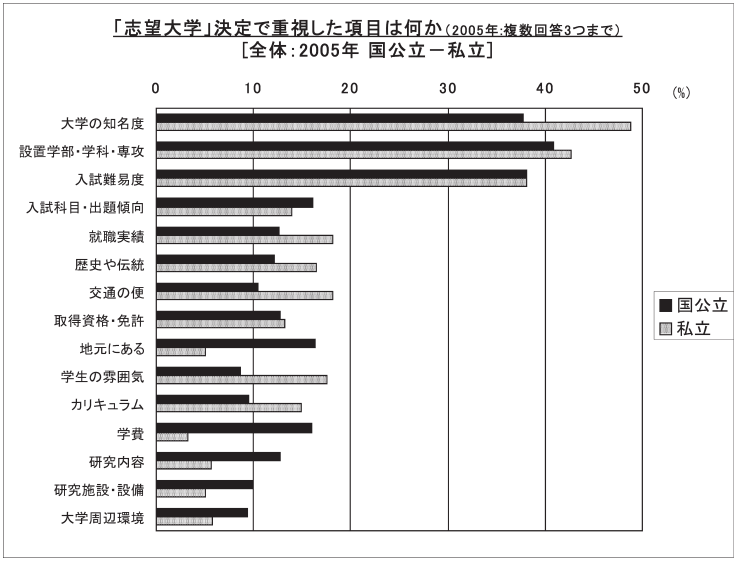
⑧

2004年度河合塾生アンケート調査



⑨

2004年度河合塾生アンケート調査



⑩

外から見た立教大学

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

企業の求める人材と大学教育に期待するもの

株式会社リクルート
国内旅行ディビジョン長
冨塚　優

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

①

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

求人倍率などから見る
新卒の状況

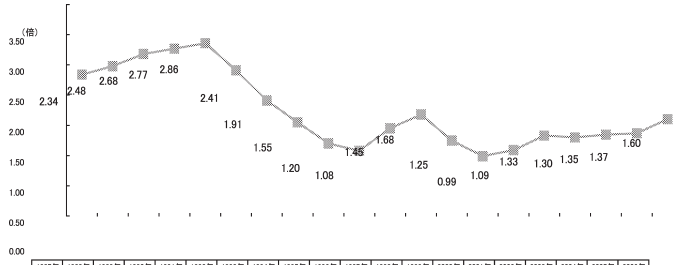
All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

②

■求人倍率の推移

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

求人総数は69．8万人で、昨年より10．2万人増加。バブル期並みに。
求人倍率は1．60倍に上昇。



	1987年3月卒	1988年3月卒	1989年3月卒	1990年3月卒	1991年3月卒	1992年3月卒	1993年3月卒	1994年3月卒	1995年3月卒	1996年3月卒	1997年3月卒	1998年3月卒	1999年3月卒	2000年3月卒	2001年3月卒	2002年3月卒	2003年3月卒	2004年3月卒	2005年3月卒	2006年3月卒
求人倍率（倍）	2.34	2.48	2.68	2.77	2.86	2.41	1.91	1.55	1.20	1.08	1.45	1.68	1.25	0.99	1.09	1.33	1.30	1.35	1.37	1.60
求人総数（人）	608,000	655,700	704,100	779,161	840,365	738,055	616,976	507,234	400,402	390,699	541,462	675,247	502,368	407,768	461,640	573,379	560,051	583,600	596,900	698,800
民間企業就職希望者数（人）	259,500	264,600	282,800	281,000	293,800	306,200	323,200	326,500	332,800	362,200	373,800	403,000	403,500	412,300	422,000	430,200	430,800	433,700	435,100	436,300

出所：「大卒求人倍率調査」ワークス研究所

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

③

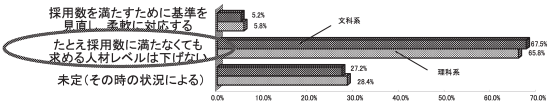
■厳しさを増す採用基準

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

企業は「質」にこだわる採用を行っており、その傾向は業種によって変わらない

新卒採用数が満たされない場合の対応

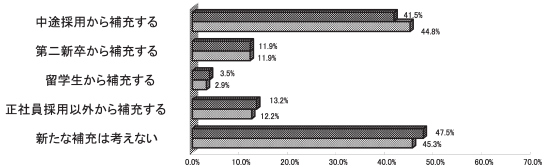
（単一回答　文科系：N＝687、理科系：N＝667）



採用予定数の不足分を補充する方法

（複数回答　文科系：N＝453、理科系：N＝444）

◇採用予定数の不足分を補充する方法（複数回答　文科系：N＝453、理科系：N＝444）



※データは無回答サンプルを除いて集計

出所：「就職ジャーナル版
就職白書2002」就職ジャーナル

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

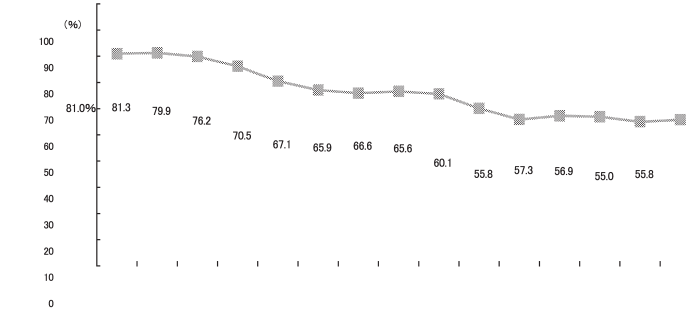
④

■新卒無業（大学生の就職率）

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

就職率は2003年より0．8ポイント回復。
しかし、未だ多くの卒業者が「無業者」に。

◇大学生の就職率



卒業年	1990年	1991年	1992年	1993年	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年
就職率（%）	81.0	81.3	79.9	76.2	70.5	67.1	65.9	66.6	65.6	60.1	55.8	57.3	56.9	55.0	55.8

出所：「文部科学省」学校基本調査をもとにリクルートMP1部にて算出

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑤

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

企業が求める学生像

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑥

■企業が求めるもの

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

企業は、

□変化が激しい環境下での競争。
□コスト競争は益々激化。
□社員ひとりひとりを教育する時間はなくなった。

新卒者にも、即戦力・プロフェッショナルが求められるようになった

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑦

■即戦力とは？

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

学生が考える即戦力

入社後、今まで学んできたスキル・知識をすぐに活かすことができるほど優れた能力・技術力がある人

企業が考える即戦力

世の中や技術の変化をきちんと掌握できる人。そして、対応できる力をつけるために、常に学び続けることができる人。

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑧

■プロフェッショナルとは？

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

プロフェッショナルとは、
その道を極めるだけではない

関連するスキルを常に学ぶことで、
技術革新や環境変化に耐えうるスキ
ルを身につけ続けている人。

求められるのは、Learning　Ability

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑨

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

企業は大学教育に
何を期待しているか

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑩

■企業が求める学生像

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

＜S社＞

学生時代に明確な問題意識を持って目標達成に努力した人は、社会人になってもその資質を持ち続ける。その資質は相当な確率で再現性がある

その再現性の萌芽を面接で見つけたい。

偏差値採用→大学名不問採用

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑪

■今、何故大学名不問採用なのか

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

~~受験：Input能力~~

社会：正解が無い

答を覚えても意味が無い。
答を創造する力が要求される。

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑫

■今までの成功の方程式

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

年功序列・終身雇用

入社してしまえば、後は安心

だから

有名大学・有名企業を目指した

企業も

学歴 は問うが、学習歴 は評価してこなかった。

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑬

■学歴から学習歴の時代へ

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

学歴

潜在的な資質

学習歴

顕在化された資質

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑭

■社会が求める顕在化した資質

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

対課題	対自己	対人
自分で目標や課題を設定して、そのために何をするか、自分で決めることのできる能力。	継続学習能力。目標に向かって、努力・勉強し自分をブラッシュアップしていける能力。	相手としっかりコミュニケーションを取り、コラボレートすることにより１＋１≧２にできる能力。

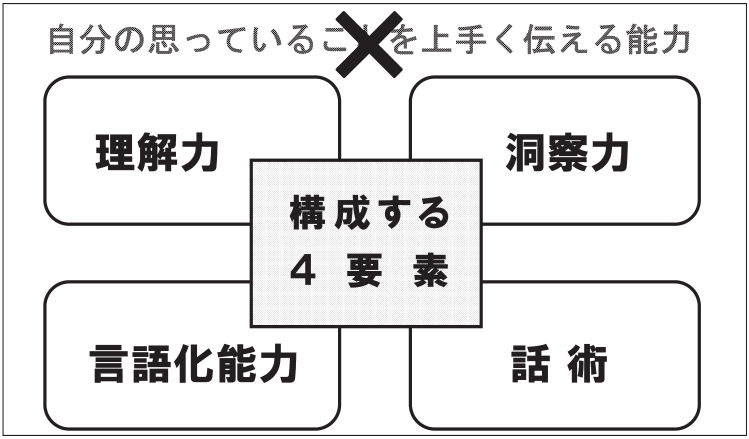
All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

15

⑮

■「コミュニケーション能力とは」

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.



All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑯

■資格取得の意味

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

「TOEIC　高スコア」＝就職に有利

＜H社＞　Can＜Will

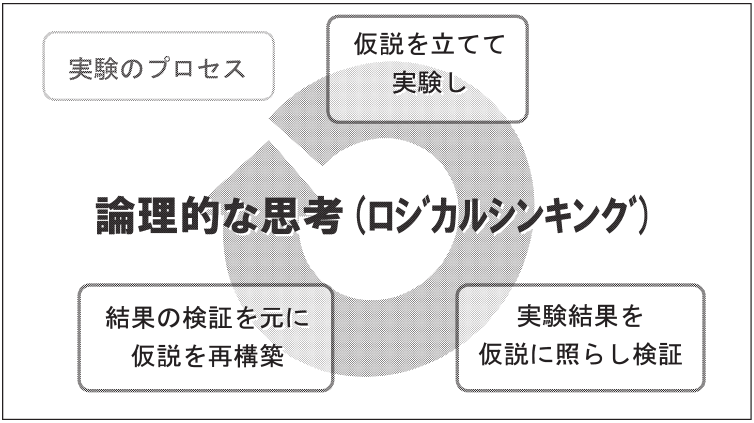
TOEICで900点以上の学生が多数いた。
だが、その学生たちのほとんどは不合格
『英語力はひとつの手段。
我々が求めたのは、21世紀を担う人材として、どう生きていきたいのか、どんな仕事をして社会に貢献していきたいのか、それらを自分の言葉で語れる人材。』

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑰

■理系学生の強み

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.



All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

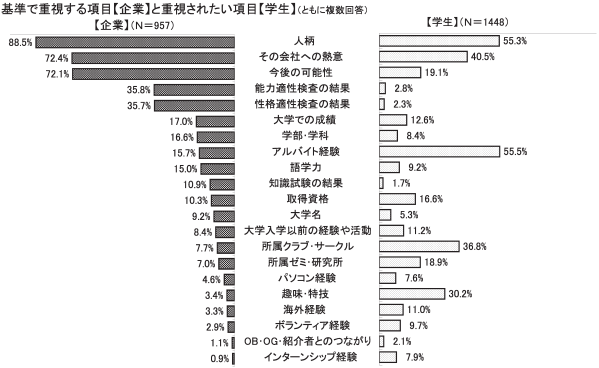
⑱

■企業と学生のギャップ　～学生のアピールポイント～

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

企業が採用基準で重視する項目トップは「人柄」。学生が重視されたい項目トップは「アルバイト経験」。両者にはギャップがある。

◇採用基準で重視する項目【企業】と重視されたい項目【学生】(ともに複数回答)



※データは無回答サンプルを除いて集計
出所：「就職ジャーナル版　就職白書2004」就職ジャーナル

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

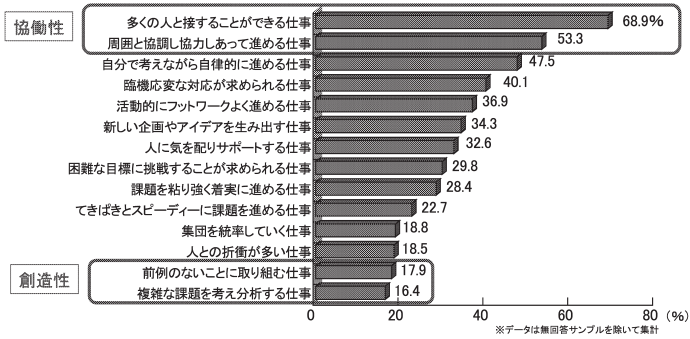
⑲

■希望する職務タイプ

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

「協働性」を表す指標が上位にあるのに対して「創造性」を表す指標は低い。

◇希望する職務タイプ(複数回答：N=1414)



※データは無回答サンプルを除いて集計

出所：「就職活動振り返りアンケート調査（2006年卒）」リクルートMP1部

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

⑳

■大学生の希望職種

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

順位	職　種　名	04登録人数
1	商品企画・プランニング	214,752
2	企画・営業推進・販売促進	165,499
3	宣伝・広報	163,783
4	販売・ショップスタッフ・接客	160,320
5	調査研究・マーケティング・データ分析	150,220
⋮	⋮	⋮
13	営業（企業向け・得意先中心）	75,401
18	営業（企業向け・新規開拓中心）	68,470
20	営業（個人向け・得意先中心）	59,422

約4割が「商品企画・ﾌﾟﾗﾝﾆﾝｸﾞ」を希望。

※2003年5/23時点　会員数56万4323人

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

㉑

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

早期からのキャリアデザイン

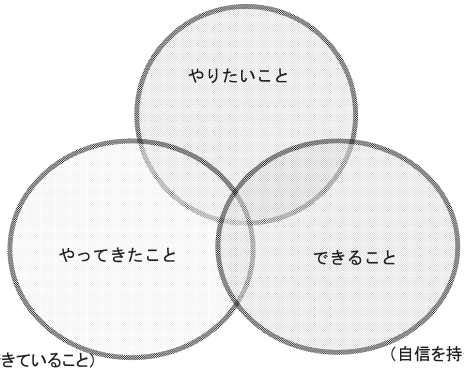
All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

㉒

■学生時代を語る3つの輪

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

意欲（言葉にして他人に伝えられる）



経験
（就職時には総括できていること）

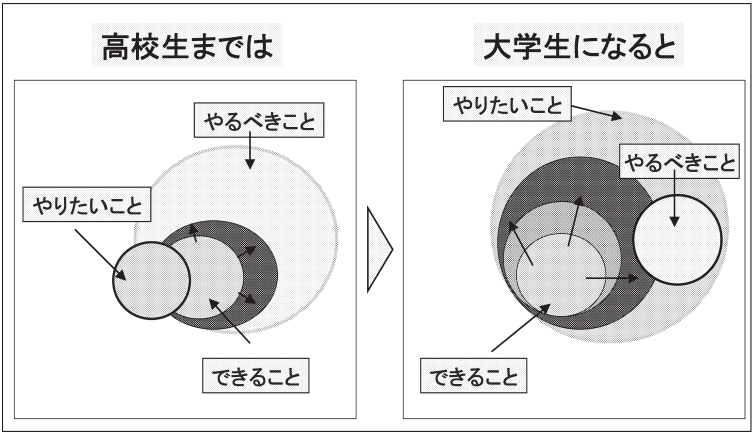
能力
（自信を持ってアピールすること）

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

㉓

■低学年の学生に伝えたい 高校生と大学生の大きな違い

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.



All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

㉔

■目標設定の仕方

FOLLOW YOUR HEART
RECRUIT
Human Resources-Integrated Service Div.

山登り型

ラフティング型

All Right Reserved. RECRUIT Co.,Ltd. 2005

㉕

2005/11/24

大学教育開発・支援センター開設1周年記念シンポジウム

「外から見た立教大学－ミッションと社会的要請－」

パネルディスカッション　指定討論者　檜枝光太郎（大学教育開発・支援センター長・理学部長）

1．立教大学はとても良い大学

立教大学は、ほんとに良い大学と年とともに思うようになってきた

私は、1965年本学理学部物理学科卒、現役教員（良いと思うバイアスがかかっている）

2．しかし、立教大学の良さの説明は難しい　雰囲気、文化？　ミッションスクール

スローガンは迫力不足　具体性がないためか？

「自由の学府」「リベラルアーツ」「専門性にたつ教養人の養成」

「道を伝えて、己を伝えず」「自由の学府、未来を拓く」「自由の体感　共創のステージに」

校歌「栄光の立教」2番

「愛の魂」「正義の心」　朝に夕べに鍛えつ錬りつ

「邦家に捧ぐ」る我等が母校　見よ見よ立教　「自由の学府」

「自由」　束縛からの自由、権威からの自由　「強い個」によってのみ支えられる

⇒　立教大学の良さを「言語化して、共有する」ことが必要

（国立大学は法人化に際して、「理念・目的・目標」を再検討して、中期計画を策定。それを社会に向かって発信。立教大学は出遅れていると言わざるをえない。）

外部から見た目の例：山岸駿介「大学改革の潮流43回　大学を選ぶときに必要なものとは－立教大学の「全カリ」に見る大学の“魂”」　月間高校教育2005年10月号80－83頁

3．立教大学の教育の目指すもの

「学生が主役の大学」

教員が「教える」教育から、学生が「学ぶ」教育へ　学生参加型の教育の工夫

新たらしい教育手法の開発　現在は教育の技術革新の真っ只中（例：e-learning）

学生は大学の重要で正規の構成員　運営にも巻き込む

「半学半教」：教えることがもっとも質の高い学習

「教室での教育」　⇒　「キャンパス全体で教育」

キャンパスのあらゆる構成員（教員・職員・学生）があらゆる場面で教育

さらに　⇒　社会との連携「コオプ教育」

「顧客満足」

学生が社会で生きてゆくための基礎を作る

21世紀知識社会を60年間生きて人生の終わりで感謝される教育

（「先生もっとしっかり学生を教育してよ！！！」キャリアセンター部長時代の切実な思い）

例：シンガポールの刑務所の顧客満足

二度と戻ってこないことが究極的な顧客満足　職業斡旋とそのフォロー

「持続可能な社会」の実現を目指して努力する「自立した」個の育成

教育改革は立教大学全体で取り組むべき課題との認識を共有し、実践する

本センターが立教大学の教育改革の発信地となるように努力したい

大学教育開発研究シリーズ　No. 1
外から見た立教大学　― ミッションと社会的要請 ―

2006年 3 月発行

発　行　　立教大学 大学教育開発・支援センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL：03-3985-4624　FAX：03-3985-4615
http：//www.rikkyo.ne.jp/grp/cdshe
e-mail：cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

印　刷　　精文堂印刷株式会社
〒116-0012 東京都荒川区東尾久1-36-4
TEL：03-3895-6211　FAX：03-3892-1544

©立教大学 大学教育開発・支援センター　　無断転載を禁ず　ISSN 1881-1035